
れんあい!! ~ けいおん!! × 恋愛 ~

伊達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

れんあい！！〜けいおん！！×恋愛〜

【Nコード】

N9871X

【作者名】

伊達

【あらすじ】

けいおん！の学園恋愛物です。オリジナル主人公が女の子（平沢唯）と出会い変わってゆく、ボーイミーツガールって奴ですな。色んなネタ、ぶち込んでます。いや、ぶち込んでます。カオスっ気ありますが、お気になさらず。

笑顔！！（前書き）

この作品はけいおん！の二次創作です。

苦手な方は戻るを、どうぞ。

あ、あと唯は俺の嫁！って方は死ぬ気で感情移入するか、戻るを、どうぞ。

笑顔！！

雪の降る中で、少女は聴いた。

少しの人混みを作りながら、奏でられる音を。

その音の元を探した。

楽しそうに歌い、演奏する少年がいた。

その音は、少女の心に響いた。

桜の降る中で、少年は見た。

通りすぎる足音から置き去りにされた一つの物。

その物の元を探した。

息を切らしながら、走り去って行く少女がいた。

歩道に置き去りにされたそれを拾い、

少年は歩き出した。

第一話 笑顔

かみさき あき
上崎 晃。

これが俺の名前だ。

そう、間違いない。

つまり、この生徒手帳は俺の物ではなく、

（やっぱ、さつき走ってった奴が落としたのか）

という事になるのか。

おっと、説明しとかないとな。

ん？ 誰につて？

気まぐれでこんな変な物を読んでる人がいるかもしれねーだろ！！
世の中なにが起こるかわからないからな！！

閑話休題イ！！

本日は新年度初日。

そして、今日から俺は！！高校生である。

別に金髪で鬼畜で外道な彼の様に、高校デビューを目論んでいる訳ではないが。

むしろ、その逆とも言える。

あまり人と関わりたくない。理由はまたの機会に。

んで、そんな俺が、都合よく今年から共学となった、私立桜ヶ丘高校に向かっている最中。

誰かが仕組んだのだろうか、食パンをくわえた少女と激突、とまではいかないまでも、隣を走り去って行った少女が生徒手帳を落とした。俺の目の前に。

（仕方がない、ちょっと中を拝借するか）

平沢 唯。

同い年か。

つて事はこいつも新人生だよな。

入学式までまだ余裕はあるはずだ、何で急いでたんだろ。

まさか、目覚まし時計の時間を見間違えて、入学初日から遅刻遅刻
ゝとか言っただけで急いだとか。

そんで、今ごろは学校で見間違えてた事に気付いて、校門辺りで見
間違えたゝって叫んでるとか！

（・・・我ながら馬鹿な想像だな、ありえやしない）

アホな考えを放りすて、新たに考える。

（届けてあげるべき、だよなー）

俺は、人と関わるのを嫌う。

というより、人を信じるのを、頼るのを、助け合うのを、好意を持つのを、やめたのだ。

もちろん例外はある。

友人がいない訳ではない。

いや、かつてはいなかったが。

今は、いる。

親友であり、仲間であり、恩人でもある二人の友人。だが、彼ら以外の人達を、俺は知ろうとしなかった。

幼い頃に、人の汚くて卑しくて厭らしい部分ばかりを見てきた俺にとって。

人とは汚くて卑しくて厭らしい生き物でしかない。

そればかりじゃないのはわかってる。

現に、俺の唯一ならぬ唯二の親友は、真っ直ぐな奴等だと思った。だからと言って全ての人に、「良い人もいる」を適用させる気はないし、当てはまるとも思わない。

接してみないとわからない？

確かにそうだ。信じて歩み寄ってみないとわからない事もあるだろうさ。だけど。

裏切られるのは、もうごめんだ。

それに、友達を増やそうとか、そんな小学一年生チックな決意も秘めてないし。

量より質。友達は、あいつらだけで十分だ。

ま、高校は別になっちゃったから、登場はいつになるかわからんが。親友なのに何で別なのかって？色々あるんだよ！

都合とか事情とか色々な！

あれだぞ、作中にはまだ出てこないだけで、俺はほぼ毎日あいつらと会う設定なんだぞ？

作中とか設定とかなに言っただ俺は！？

ええい、閑話休題イ！

(・・・ま、届けるだけならいいか)

そうして、俺は単なる気まぐれで、ほんの些細な気まぐれで、この手帳を持ち主に届ける事にした。

学校に到着、入学式を終え、自分のクラスを掲示板で確認。と、そこで平沢 唯の名前も同時に確認。

(一緒のクラス、か)

普通感覚なら、ここでこの生徒手帳をきっかけにお近づきになろうといった風になるんだろうな。
でも、

(探す手間は省けたが・・・チツ、めんどくせえ)

もしも、向こうがそういう考えを持ったなら、と思うと頭が重くなる。

ま、話しかけられても、不機嫌そうに突っぱねたら大丈夫だろ。

これが大丈夫というのも、やはり変な思考なのだろうが、気にしない。

ひとまず不機嫌面全ツツパを心に決め、教室へ向かう。

教室へつながる廊下を曲がろうとしたその時、視界が暗転し、気付けば天井を仰ぎ見ていた。

と同時に、

「いつ！・・・てえ」

顎に鈍器の様な物で殴られた様な、激痛が走る。
決してボールの様な何かではなく。

電流が走った訳でも、ましてや野菜サラダが走った訳でもない。マ
マ早い。なんの話だ！？

痛みに気が動転して、意味不明な事を口走って、もとい思い走って
しまったが、とりあえず冷静になってみる。

なってみたところ、どうやら誰かとぶつかってしまったみたいだ。

「うっ、いたいっ・・・あつ、だ、大丈夫！？」

と、俺とぶつかったであろう人物が、頭をさすりながら涙目で、心
底心配したふうに見えてくる。

「ああ、俺は大丈夫・・・ん？」

この女、見覚えがあるぞ。しかもごく最近。
具体的に言えばついさっき。

もっと具体的に言えば生徒手帳的な物の写真欄で見覚えがあるぞ。
ティンと来た！

間違いない、写真よりも間抜け面をしているが、こいつがあの生徒
手帳の持ち主だ。

「なあ、あんた平沢さんだろ？」

言いながら、先ほど拾った生徒手帳を渡す。

「あつ、あつた！よかったっ！もしかして拾ってくれたの！？」

満面の笑みである。

眩しすぎるぞ、1ターン待たなくてもソーラービームが打てそうだがここで、はいそうですと言おうものなら、こいつは俺が善人だと勘違いするだろう。

その勘違いはこちらにとっても不都合なので、適当にごまかしとくか。

「いや、気づいたら手元にあっただ、拾って届けようと思った訳では断じてない」

我ながら完璧なカモフラージュだつ。

「え、すごい！それって、無意識の内に落とし物を届けちゃう程度の能力が備わってるって事だよね！？」

その発想はなかった！！

つつか何だその能力、発動範囲狭すぎだろ！！

「えゝ？でもすつごく便利だよ？？」

「人の心を読むなっ！！さとり妖怪かお前は！！その能力の方がよっぽど便利だよ！！」

「別に読んだわけじゃないよ。なんとなく、かな？」

「なおさら凄いわ！！」

はっ、いかにかん。

すっかり奴のペースに乗せられてしまった。

何を楽しそうに会話してるんだ俺は。

そうだ、確かに楽しいかもしれないが、それも今だけだ。
こいつもすぐに嫌な部分が見えてくる。

裏切られるくらいなら。

裏切られるくらいなら、信じなければいいんだ。

期待するな。

あいつらの様な・・・悠^{ゆう}と晴^{はる}の様な奴らは、簡単には現れない。
もしかしたら、二度と。

「・・・じゃあ、俺そろそろ行くから」

そう言つて、その場を後にし、教室へ向かおうと歩を進める。

「あ、待つてよー」

トコトコと小走りで近づき、横に並び歩く平沢。

「ねえねえ、男の子って事は同じ新入生だよね？お名前なんていうの？」

「上崎 晃」

一瞬、もう無視してしまおうか悩んだが、どうせ一緒のクラスだ。
いずれ知られると思い、最低限の自己紹介。

「アキ君だね！私は平沢 唯だよ！」

「知ってる」

「ほえ！？何で知ってるの！？エスパー！？」

「生徒手帳」

「あ、そうだったね。すっかり忘れてたよ」

「何秒前の出来事を忘れてんだよ・・・」

「ねえねえ、アキ君は何組だった？」

「3組」

「え、ホントオ！？やったあ、一緒のクラスだよ！」

「何で喜ぶんだ？」

「えゝ？だって、アキ君みたいな良い人と一緒のクラスなんだよ？嬉しいに決まってるよ！」

やっぱり。

勘違いされていた。

これは由々しき事態だ。やっぱり生徒手帳なんか拾わなければよかった。

俺が良い人？有り得ない。何を言ってるんだこいつは。あれは単なる気まぐれだ。大体、落し物を届けただけで良い人って。良い人になるのって簡単だな。みんなもやってみよう。

「・・・悪いけど、友達探しなら他を当たってくれ」

こういうタイプの奴は、真正面から拒絶するのが一番だ。

何度も経験してきた。

ほえ？と間の抜けた声を出し、怪訝な顔をする平沢に言葉を続ける。

「そういうの迷惑だから。俺に構うな」

と言に残し、少し足早に教室へ向かう。

最後に見た、呆氣に取られたような、少し寂し気な平沢の顔が、印象的だった。

人を拒絶するのは、何度も経験してきたけど。

何度経験しても、慣れないもんだ。

あいつの印象は。

生徒手帳を落とすなど、どこか抜けている気がする。何か雰囲気でわかる。

あと、実物は写真で見るとより結構可愛い。

色恋沙汰には興味ないが。

それと、一番思った事は。

暗い表情が、とても似合わない奴だ。

（ま、これで一件落着だ）

人を拒絶して一件落着、か。

とことん、最低な奴だな、俺は。

でも、これでいい。

これであいつも、俺みたいな奴と関わらなくて済むし。

俺も、人と関わらなくて済む。

丸く収まったんだ。

（3組・・・ここだな）

教室のドアを開け、座席表を見て出席番号順に座る。

少し遅れて平沢が入ってきた。

と、それを見つけた女子（平沢の友達だろう）が、歩み寄って話しかけている。

生徒手帳絡みの話をしているみたいだが、我関せず。

教師が来るまで寝ていようと思い、机に突っ伏したのとはほぼ同時に

「和ちゃん、この人がアキ君だよ！」

と、聞き覚えのある声に名を呼ばれた。

この元氣ハツラツで元氣イッパイな声の主。

それは、まぎれもなく、ヤツさ。

顔を起こし、声のした方を見る。

平沢と、赤いフレームの眼鏡が良く似合っている、知的な感じの女子。

「初めまして、真鍋 和です。唯とは幼馴染で、クラスもずっと一緒なの。上崎君が唯の生徒手帳を拾ってくれたのよね？どうもありがとう」

ペコリ、と頭を下げてくる真鍋さん。

凄く礼儀正しい、というかあんたがお礼言う事じゃないだろ。

あんたは平沢のなんだ。

保護者か。

「この子、昔からおつちよこちよいで抜けてる所があるのよね。だからいつも心配させられるの。だけど根は凄く良い子だから、上崎君も良かったらこの子と仲良くしてあげてね」

「保護者かつ！」

お母さん気質にも程があるぞ！

思わずツツコンでしまったじゃないか！

「どーぞ仲良くして下さい！」

「お前はさっきの話を聞いてなかったのか！」

満面の笑顔で手を挙げながら言った平沢にも、思わずツツコミ。
なんだその笑顔は、さっきの寂し気な顔は気のせいか！？
ああいうのはあんまり気にしないタイプの人か！？

「ほえ？さっきのつて、ああいうネタじゃないの？」

アホの子か、そうか！

横で真鍋が「さっきの話？」と聞いているが、何でもないと流す平沢。

と、教師が教室に入ってきた。

各々が席に着く。

平沢と真鍋も、また後でと挨拶を交わし、散っていった。
全員が着席したのを確認した担任が、出席を取る。

今更気付いたが、このクラスに男子は俺一人だった。

まだ共学になりたて、やはり男子は全然いないみたいだな。

ま、いようがいまいがどっちでも構わんが。

そして、とりあえずの自己紹介を経て（もちろん俺は名前を言うだけの質素な自己紹介）席替えタイム突入。

お目当てである窓際の一番後ろの席を見事引き当てた俺は、少し浮かれた気分で席を移動する。

だってそうだろ？窓際の一番後ろと言えば、人との関わりが一番少ない所だぜ！？

前と右隣の席の奴と関わらなければ、この席に位置する間は安泰だ！
よしよし、これで周りに大人しい奴らばかり集まってくれば完璧

なんだが。

贅沢は言わないぜ！

「あ、後ろアキ君だ！わーい、よろしくねー！」

終了のd(＾0＾)bお知らせ

よりもよってお前か、平沢！

と、俺が嘆いている間にHRは終了し、入学式特有の早めの下校時間となった。

周りがガヤガヤと騒ぎ出し、新しい出会いを満喫する中。

俺は一人、颯爽と教室を飛び出し帰路へ。

校門を出て、桜並木の通りを歩く。

すると。

「ねー待ってよアキ君ー！」

またヤツだ。

やれやれ、お前はもう一回言わないとわからんみたいだな。

俺は覚悟を決め、振り向く。

そして、問う。

「なあ、俺に構うなって言っただよな？」

「それってなんでなの？」

「迷惑なんだよ」

「なんで迷惑なの？」

「人と接するのが嫌いなんだよ」

「どうして？」

うわー。うぜー。

あと無限ループ怖いわー。

つつかちよつとイライラして来たな。

「お前に話す必要ねえだろうが」

「話してくれないなら、私はずっとアキ君に構うよ？」

「・・・っ、いい加減にしろよ！今日会ったばかりだろうが！放つとけばいいだろ、俺みたいな奴は！」

「やだ」

っ、こいつは何なんだ！？

意味が分からない！理解不能だ！

今日初めて会って、構うな、迷惑だって言われた男に、何でそこまです！

そんな変な奴、無視しとけばいいだろ！

構わなければいいじゃないか！

俺と関わっても関わらなくても、お前の人生に何の変化も影響もないだろ！

「だって、決めたんだもん」

と。

平沢は言葉を続けた。

「決めた？何を？」

そう訊くと。

平沢は。

今日見た中でも。

一番の笑顔で。

「アキ君と絶対友達になるって、決めたんだもん」

そう言った。

俺は思った。思ってしまった。

俺と関わっても関わらなくても、平沢の人生には何の変化も影響もないかもしれない。

けど。

平沢と関わることで、俺は何か変わるかもしれないと。

変わるかもしれないと。

平沢の笑顔に気づかされたんだ。

俺は。

裏切られるのが怖い、それを理由にして。

人と関わる事から逃げていたんだと。

本当は。

本当は、人と話すのが、遊ぶのが、関わるのが、大好きなくせに。

幼い頃のトラウマを、いつまでも引きずって。

逃げていたんだと、気づかされた。

そんな自分が情けなくて。

だけど・・・少し、ホッとした。

「なんで・・・俺なんだ？」

気持ちも若干落ち着いて来たので、とりあえず一番疑問だった事を

聞いてみる。

まさか、生徒手帳だけが理由じゃあるまい。

「えつとねえ……なんでだろ？わかんないや」

「……は？」

なんだっ
て？

「最初に構うなって言われた時に、なんとなく気になったんだよね。」

なんとなく？

「……ぷっ、あっははははははははははははははは！」

何年間も、トラウマから、過去から逃げて来た。

本当に、一世一代の決意で、立ち向かおうと決めたのに。頑張ろうと思ったのに。

俺を焚き付けた張本人の行動原理は、なんとなく。

俺はなんとなく、過去に立ち向かうのか。

・・・そんな、しょーもない事だったのかな、俺の過去って。

結局。

俺自身が弱かっただけか。

「あ、アキ君や」と笑ったね！」

「ははははははっ……あー腹筋が崩壊寸前だ。よくもやったなこのヤロー」

「えへへ。悔しかったらアキ君も、私を笑わせてみたら？」

と。

さっきまでとは違う、悪戯っぽい笑みを浮かべて、平沢は言った。
俺は降ってくる桜の花びらを見ながら考えて、また笑いが出てきた。

「いや・・・いや」

あんなに思いつきり笑ったのは、本当に久しぶりだった。

妙に気分が清々しい。大声出して笑うのって、あんなに気持ちよかつたかな。

とりあえず、明日から心機一転、小学一年生チツクな決意を秘め、俺は今度こそ帰路につく。

平沢に一言残して。

「だってお前、いつも笑ってんじゃん」

笑顔！！（後書き）

週一回くらいのペースで上げていこうと思ってます。
万が一、予想より読者様が多ければもう少し早めます。

部活！！（前書き）

とりあえず、書き溜めていた分を投下します。

今回から如実に現れますが、原作の設定を一切守っていません。
「構わんよ」という益荒男だけ、どうぞ。

部活！！

入学してから、早一週間。

つまり、あのおてんば娘、平沢唯と出会って、一週間。

あの桜の降る道で、『絶対友達宣言』を受けて、一週間。

俺が、過去との決別を決意して、一週間。

平沢は相変わらず、人懐っこい笑顔を浮かべて、ニコニコして近づいてくる。

おかげで、少しは打ち解ける事が出来たと思う。

けど、他の人とは全く進展なし。

むしろ、真鍋以外とは未だに話した事もなければ名前も知らない。

俺は友達が少ない。隣。部でも立ち上げてやろうか。

閑話休題。

1年3組の教室の前で、一度足を止め、ふう、と軽く息を吐く。

戸を開け入室。私は帰ってきた！

俺の前の席で何やら唸っている平沢。

いつもならこいつの方から挨拶してくるのだが。

俺が来た事にも気づかない程、考え込んでいる様子。

少し躊躇ったが、俺の方から挨拶すべきだと思い、平沢の名を呼ばうとした時、

「何唸ってるのよ、唯」

と、今日も赤いフレームの眼鏡が良く似合う、真鍋さん登場。今日も知的です。

「あ、和ちゃん。実はどの部に入ろうか迷ってた」

「ええ！？まだ決めてなかったの！？もう学校始まってから一週間も経ってるよ？」

保護者か！

というか、まだ最後まで言っ てなかったのに！

速い、速すぎる！速さが足りてる！

というか、怒りなれてる！

いきなり真鍋に怒鳴られ、少し後ずさりながらも、

「でもでも、私運動オンチだし、文科系のクラブもよくわかんないし・・・」

などと逃げの一言を繰り出す平沢に、大きく溜息を吐き、真鍋は嘆く。

「こうやって二ートが出来上がっていくのね・・・」

なに！？

「部活やってないだけで二ート！？」「」

はっ、思わず口に出してしまった！

二人は驚きの表情でこちらを見る。

「あれ、アキ君いたの？おはよー」

「いたよ、おはよー」

「おはよう、晃」

「真鍋もおはよう」

「あら、和でいいわよ」

「え？いや、でも・・・」

「クラスメートだし、遠慮はいらないわ。私も晃って呼んでるんだし」

「お、おお・・・じゃ、おはよう和」

「それでいいわ」

「アキ君、アキ君！私も唯でいいよ！」

「いや、お前はいいや」

「ふえ！？なんでー！？」

「や、なんかそっちの方が面白そうだし」

「なにそれー！ひどーい！」

「晃もなかなか唯の扱いに慣れてきたわね」

「お？そうか？」

そりゃ、結構な褒め言葉だね。

というより、今言われて嬉しい言葉ランキングの上位にランクインするかも。

この一週間は無駄じゃなかったって事だしな。
よかったよかった。

などと安心している俺の前で、平沢が頬を膨らませてプンプン怒っている。

いや、本当にプンプン聞こえる気がする。

つつか、ぶっちゃけると平沢は下の名前呼ぶの、何か抵抗あんだよね。

何でだろ？

ま、いつか。本当にちょっと面白そうだし。

「それじゃ、私は席に戻るわ。唯、ちゃんと考えなきゃ駄目よ?」

「はい」

「ホント、保護者だなあ」

「晃、あなたも部活入ってないんでしょ?一緒に考えたら?」

ゲゲツ、藪蛇だ。

というか俺は部活出来ない事情があるんだが。

まあ説明すんのも面倒だし、適当に流すか。

「わかったよ、母さん」

返ってきたのは言葉ではなく拳骨でした。痛いよママ。

そのまま、呆れ顔で席に戻る和を見送って、平沢が話しかけてくる。

「アキ君、部活やらないの?」

「やらないんじゃないくて、出来ないんだよ。時間的にな」

「早めに帰らなきゃいけないの？あ、わかった！何か習い事やっているんだね！？」

うむ。

当たらずとも遠からず。

ま、ほぼ正解かな。

「ま、そんなとこだ。だから俺の事はいいんだよ。お前はとうすんだ？」

「ん、さっきも言っただけど、私運動オンチだし、文科系のクラブもよくわからないから・・・」

「何か気になるクラブとか、やりたい事とか無いのか？」

「やってみたい事はあるんだけど、私には到底無理っていうか・・・」

「え？いや、それは」

おかしいと、そう俺が言い終わる前に、担任が教室へ入ってくる。

「あ、先生来ちゃった。アキ君、また後でね」

「お、おお・・・」

中途半端な所で話をきられたが、今の言葉は聞捨てならんな。ちゃんと諭さねば。

と思ったが。

平沢唯、昼休みまで爆睡。

授業はちゃんと受けような。

ん？俺か？俺は頭は悪いかも知れないが、勉強は出来るんだぜ！
見直しただろ！

ともあれ、平沢と話す機会を得られず、放課後。
どうするかと考えていた矢先。

「アキ君、クラブ見学行こうよ！」

と誘われた。これは好都合だ。

しかし、なぜ俺を誘うのか。和を誘えばいいのに。
思ったが、見渡したところ、和は教室にいないようだった。
それならと、とりあえず返事しておく。

「だが断る」

「何で！？絶対オーケー出す流れだったよね！？」

「お前、また心を読んだな！？」

「うっん、なんとなく」

「お前のなんとなくはもはや神の領域だよ！」

「心読める人なんかいないよ」

「ま、そりゃそうだが・・・」

「あ、でも唇は読めるよ！」

「すげえ！」

読心術は無理でも読唇術はイケるってか！
何者だお前は！

ま、俺も独身術は心得てるがな。ふふん。

「なにそのマイナス要素な術・・・っていうか、高校生なんだから
独身なのは当たり前じゃん」

「だから心を読むな！」

「今のは表情から読み取ったんだよお」

「マジかよ！俺がどんな顔してたってんだ！」

「何かね、もの凄いドヤ顔」

「恥ずかしい！」

ふふん。の時か！ふふん。の時かー！

「とりあえず、行こ？」

「おっけー」

アホなやり取りを終え、教室を出る。

え？普通に会話できてるじゃないかって？

何かね、やってみたらね、出来た。

人のコミュニケーション能力の底力を垣間見たよ。

ま、平沢が話しやすいつてのもあるけどな。
とにかく、色んな部活を見て回る俺達。

が、平沢はまだ決めかねている様だった。
というか、いつまでこの不毛な行為を繰り返すのか。
見て回ったって、意味ないのに。
そろそろ、いいかな。

「平沢、ちょっと疲れないか？」

「うん、歩き回ったからね」

「じゃ、このベンチに座ってろ。飲み物買ってきてやるから」

「おお、太っ腹！私イチゴオレ！」

「はいよ」

自販機に向かい、イチゴオレとカフェオレを購入。
中庭のベンチに戻り、頼まれた物を平沢に渡す。
ありがと、いつもの満面の笑顔で受け取る。
俺も横に並んで座り、カフェオレを飲む。うん、甘い。
二人して喉を潤し、一息ついたところで、

「なあ、平沢」

と、俺は口を開く。

平沢はストローをくわえたまま、ふも？と返事をし、こちらを向く。

「やりたい事、決まってるんだろ？なら、これ以上見て回ったって
意味ねえよ」

言つと、平沢は目を丸くし、ストローを口から離し、でも・・・と言つて俯く。

・・・なんて。

なんて、似合わない顔をしているんだ。

こいつに今こんな顔をさせているのは、紛れもなく俺なんだけども、でも、言葉を止めるつもりはない。

俺は続ける。

「お前は、自分に出来る事を探してるのか？それとも、やりたい部活を探してるのか？さっき言つてたよな、やりたい事はあるけど、私には無理だつて。そうじゃないだろ。出来る事をやるより、やりたかつた事を出来る様になる方が、絶対楽しいじゃねえか。何でやる前から無理だつて決めつけるんだ？」

諦めんなよー！頑張れ頑張れ出来る出来る絶対出来る！

シジミがトゥルルって頑張つてんだよ！お米食べる！

と続けて言いそうになったが、なんとか理性が勝つたようだ。

危ない危ない、流石に今のこの空気ですんな事しまつたら台無しだ。

うーむ、やっぱりシリアスは苦手だなあ。

でも、これだけは言つておきたかつたからなー。

満足満足。

つて、あれ？

もう結構長い間沈黙だけど、もしかして意味通じてなかった？

じゃあもう一回言わないといけないの？

大事な事だから二回言つのは構わんが、流石にさっきのセリフを二回言つのは、

ちよつとなー。

恥ずかしいなー！

などと考えていると、ようやく平沢が口を開いてくれた。助かった！

「・・・うん、そうだね。アキ君の言う通りだよ！私、頑張ってみるよ！」

うん、分かってもらえたようで何よりだ。

それと、平沢の笑顔が戻ってよかった。

平沢を凹ませたままだと、あれだしね。

全国の唯ちゃんファンに何をされるかわかったもんじゃないからね。メメタア！

「アキ君、早速いつてくるよ！善は急げって言うからね！」

と、言うが早いか、校舎へと向かう平沢。

頑張れよーと平沢の背中につけて、俺も帰ろうと校門へ向かう。そこで、

「アキくーーーーーん！」

と、大声で名を呼ばれる。

何事かと思い振り向くと、平沢がこちらに手を振っていた。そして、こう続ける。

「今日はホントにありがとー！連れ回しちゃってごめんねー！ジュースありがとー！アキ君のおかげで、入部する決心がついたよー！ホントのホントに色々ありがとー！！」

と言って、両手を更にブンブン振ってくる。

というか、凄く周りの人達に見られている。やばい超恥ずかしい。いいから早く行けと手で合図し、俺は振り向いて今度こそ校門を出

る。

俺のおかげと言っていたが、元々あいつにはやりたい事があったんだ。

俺は少し背中を押したただけなんだけどな。あいつが勝手に決めたんだ。

俗に言う忍野理論って奴だ。

助けるんじゃないよ、君が勝手に助かるだけ。僕は少し手を貸すだけだよ。

これが忍野理論。

知ってる人は知っている。これ、ちよつとまずいかな？

とにかく、あいつが決心したのは俺のおかげ、とは全く思っていないけど。

でも、だけど。

人に感謝されるのも、中々・・・悪くない。

少し良い気分になり、なんとなく空を見上げる。

随分と茜色に染まっている。もう夕方か。

大遅刻だな、あいつらは怒っているだろうか。

けど、あの二人なら許してくれると思う。

『友達』と話していた、って言えば。

そんな事を思いながら向かった。

自分でも気付かない内に、口元を緩めながら。

少し、小走りで――

部活！！（後書き）

晃くんが段々といい子になっていきますね。
そういうお話です。

過去！！（前書き）

晃の過去が少し明かされます。

邪気眼とかでは決してない！

あと自分で勝手な設定をかなり付け加えてます。

苦手な方は戻るを、どうぞ。

二次創作ってそんなもんでしょガッハッハと笑い飛ばせる豪快な方だけご覧ください。

過去！！

4月末。

桜も散り散りになってしまった、ただの並木道を歩く。

他の登校中の生徒達は、心なしか、どこか浮かれている。

それは新しい生活環境に慣れ、楽しみを覚え始めたからだろうか。

または、黄金週間などという大それた名の連休前だからか。

はたまた、暖かい陽気に頭をやられたか。

かく言う俺も、浮かれている登校中の生徒達、の内の一人ではあるけれど。

だってそうじゃないか。

新しく友達が出来て。

今週を乗りきったら中型連休だし。

天気もポカポカしてて気持ち良いしな！

生きててよかった！

「全部アキ君自身の事だったんだね・・・」

「ひゅい！？」

驚きのあまり奇声を上げてしまったじゃないか！

どこぞの河童みたいな！

「いきなり現れるな話しかけるな心を読むな！心臓止まるかと思っ
たじゃねえか！」

「アキ君おはよー」

「おはよー！」

挨拶のタイミングがおかしいんだよ！

テンポが狂うじゃないか！

元々、この作品にテンポもあつたもんじゃなかったけども！

お前のタイミングは独特すぎんだよ！

「だめよ、唯。あんたが晃の心を読みすぎたせいで、もし晃が何も考えない機械人間になっちゃったらどうするの？」

赤フレ眼鏡知的和登場。

平沢と一緒に登校中だったか。

それより、ナイスフォローだ和！

保護者のお前が平沢の読心術をやめさせるんだ！

「晃に何の取り柄もなくなっちゃうじゃない。ダラダラと意味のわからない妄想を垂れ流すくらいしか、能がないんだから」

「期待した俺が馬鹿だったよ！つうかそれって取り柄じゃないよね！？あと何いきなり毒舌キャラ立てて来てんの！？前回まで優しい保護者キャラだったよね！？」

何があつたんだ！

二話から三話にかけてお前に何があつた！？

いや待て、逆に考える。

これが和なんじゃないか？

今までの優しくて礼儀正しい和は、いい子ぶってただけであつて。

この毒舌な和こそが、本当の和なのかも。

だとしたら、喜ぶべきだ。

こんな俺に対して、心を開いてくれたという事なんだから。軽蔑などするものか。

俺も、作らず飾らず、本当の自分で接していくだけだ。

「ま、冗談だけどね」

「ですよー」

教室に到着。

和は廊下側の席なので、いったん別れる。

平沢と共に窓際の席に着席。

そういえば。

「平沢、もう部活はやってるのか？」

あれ以来、平沢と部活の話をしていない。

もちろん話す機会はいくらでもあったのだが。

平沢が、決心出来たのは俺のおかげ、なんて言うものだから。

部活の話をすると、何か恩着せがましい気がして躊躇われたのだ。

しかし、やはり気になるものは気になるので。

辛抱たまらず聞いてみた。

「あ、それがねー、まだちゃんと始められてないんだー」

「ん？何でだ？」

「楽器を買わないとね、練習出来なくて」

「楽器？吹奏楽部か何かか？」

「んーん、軽音部だよー」

お？

軽音？

「えっと、パートは？」

「ギターです！ふんす！」

と、何故か誇らしげに胸を張る平沢。ていうか、まさか軽音部とは。しかもギターとは。こりゃ面白い事になった。

「平沢、実は・・・」

と、俺がいかけた時、いつの間にか俺達の傍まで来ていた和が、平沢に問う。

「そついえば唯、どうして軽音部に入ろうと思ったの？別に昔から音楽に興味があつた様には見えなかつたけど」

俺の言葉を遮られはしたが。

ふむ。確かに、それは俺も気になるところだ。

なので、とりあえず平沢の答えに耳を傾ける事にする。

「さすが和ちゃん！よくぞ聞いてくれました！それにはちゃんとしたエピソードがあるのです！」

それは意外だ。

平沢の事だ。どうせまた、なんとなくやりたいとか、そんな感じだろうと思っていたのに。

おっと、あんまり失礼な事考えるとまずいな。

何せ平沢は人の心が読めるみたいだしな。主に俺の。

むしろ、すでに読まれてやしないかと不安になり平沢の様子を窺うが、問題なかった。

何も知らずに、平沢は「実はね」と続ける。

「去年のクリスマスにね、道端で知らない人達が路上ライブやってたの。プロとかじゃないのに、ちよつとした人だからも出来てて凄かったんだよ？それでね、暇だから少し離れたところで見てたんだ。それで、その人達の演奏を見たり聴いたりしてたらね、凄く感動したの！特にボーカルとギターも一緒にやってた人はね、とっても楽しそうに演奏してて、歌も上手で・・・それを見てね、私もこういう風に、何かに夢中になりたいって、そう思ったんだ」

「ほお・・・」

「意外とまともな動機だったわね・・・」

「な、ちよつと拍子抜けしちゃうよな」

「そうね、むしろ多少裏切られた感もあるわ」

「二人共ひどい！たまには普通に褒めたって、罰は当たらないよ！？」

「いや、確かに立派な動機だとは思っけど。」

「言わないよ？」

「口には出さないよ？」

「だって、そっちの方が面白そうだし。」

「そんな事より唯、その路上ライブってどこでやってたの？」

そんな事って。

それはちよつとひどすぎるんじゃないかなー。

さっきまで一緒になってイジメてた自分を棚に上げてる気もするけど。

さすがの平沢も、ちよつと落ち込むんじゃないか？

「駅前にちよつとした広場があるでしょ？あそこだよ」

気にしてない様で何よりです、はい。

つて、ちよつと待てよ。

クリスマスの日に？

駅前の広場で？

路上ライブ？

んん？

おやおや？

「な、なあ平沢。そのバンドの名前とか、覚えてるか？」

「ほえ？うつん、バンド名は英語だったから、よく覚えてないや」

「そ、そうか、英語だったか、そうか」

「？アキ君もしかして、心当たりあるの？」

「イエ、マツタク」

「そっか、ならいいや！」

「唯・・・あなた、鈍すぎよ・・・」

和の言葉にほえ？何が？と間拔けな声で聞き返す平沢。

というか、余計な事言っとなよ和！

と、ここで担任のご登場。

なんてナイスなタイミングだ、あんたは神か！後でジュースおごってやる！

その神の一声で、生徒達が席に着く。

もちろん和も例外ではなく、俺達に「また後で」と軽く手を振り、席に帰った。

「そう言えばアキ君、さつき和ちゃんが来る前、私に何か言おうとしてなかった？」

「キノセイダロ」

平沢の不意打ちに少し動揺したが、すぐに平静を取り戻し、いつもと変わらぬ調子で答える。

え？動揺しまくりじゃねーかって？

またまたー、そんな事ないだろ。

ほら見る、平沢も「そっかー」って言ってもう前を向いちまってる。俺に怪しいところがなかった証拠さ。

ん？ていうかさつきから話が見えないって？

あともうちよいでわかるから！黙ってる！

担任の話が終わり、再びつかの間の自由時間を手にする。

が、俺に自由は無いらしく、和に呼び出しをくらう。

廊下に出て、和が俺に小声で訊ねる。

「さつきの話だけど」

ま、そーなるわな。

白状するしかなさそうだ。

和に下手な誤魔化しや嘘は通用しないだろうし。

むしろ、既に全てを知っている様な、そんな眼光すら放っている。

「多分、お察しの通りだよ。平沢が見たっていうライブ・・・」

一度息を吸って。

とびつきり大きな溜め息を吐いて、言う。

「ありや十中八九、俺達のライブだ」

中学二年生の夏休みが明けたある日。

あの日は、まだまだ9月の初めだと言うのに、やたらと涼しい心地よい風が吹いていたのを覚えてる。

もちろんその頃の俺は、人間不信がピークで。

誰とも話さず、関わらず、独りで過ごしていた。

幼い頃の、ある出来事をきっかけに、人を信じられなくなった。

実際は信じられなくなったのではなく、

信じなくなっただけだと。

今になって気付いたのだけど。

その時の俺は、とにかく人を拒絶していた。

そんな独りの世界に入り込んだのが、あの二人。

当時の同級生だった、坂山さかやま悠ゆうと神田かんだ晴はるである。

知り合ったキツカケは何てことない、些細なところだった。

体育の時間に、バスケの3on3をやった時。

自由に組分けをする事になり、三人一組のチームが次々と出来てい

く中、俺は憂鬱になり、フケようと外に向かった。

それをあいつらが呼び止めたのだ、一人足りないから入ってくれと。

サボるよりは無難に授業を受けた方がいいと、俺は承諾した。

最初は、適当にやって終わるつもりだったのに。
ただの気まぐれか。

それとも、あまりに熱心な二人に触発されたのか。

俺は、二度と使わないと決めていた、『目』を使った。

別に厨二的なあれじゃないぞ！

人より空間把握能力が優秀で、反射神経が優秀な、ただそれだけの
普通の目。

でも、この目のせいで。

多感な小学生の時分に、妬み嫉みの視線を受け、差別と孤独を味わ
って。

俺は、更に人を嫌いになった。

更にと言うのは、これが二つ目の理由だからである。

授業が終わった後に、晴が俺にこう訊いた。

バスケット部入ったら、即レギュラーだろ。何で入らないんだ？と。

俺は、その事を話した。

何んでこんな事を話したのかはわからない。

もしかしたら、誰かにわかって欲しかったのだろうか。

哀れみでもなく。

同情でもなく。

理解して欲しかったのかもしれない。

それを聞いた晴は、そのどれでもなく、ただただ俺の目に感心を示
し、もったいねーと呟いていた。

そして悠は。

こう言った。

「なら、そんな目なんか使えない事を初めればいいんだよ。そこで、
僕達と一緒に・・・バンドでも組まないか？」

「・・・その時は断ったんだけどさ、次の日も、その次の日も、毎日飽きもせずしつこく誘ってくるんだ。どうしてもギターとボーカ
ルを、お前にやって欲しい！って。だから俺が折れた。あいつらに
興味もわいたし、とりあえず体験ってことだな」

和は、ずっと黙って、真剣な顔で俺の話を聞いてくれている。

「それで、三人でよく集まるようになってな。凄く楽しいと思える
様にもなった。本当に救われた。だから、俺は必死で練習した。あ
いつらが大好きな音楽で、あいつらを大物にして、恩返ししてやる
うって思った。・・・これが、俺が音楽を始めた理由だ」

とりあえず話を終えた俺は、再び大きく息を吸って、吐いた。
今までずっと黙っていた和も、そう、と口を開く。

「色々と話してくれるのね。それくらい私にも、心を開いてくれ
るって事かしら？」

「ん、まあ・・・俺の勘違いじゃなければ、友達だし・・・」

「あら、ありがと。でも、それなら唯にも話してあげたっていいじ
やない」

「や、別に過去を隠す気はないんだけどさ」

平沢には、悠や晴と同じくらいに感謝してるし。

「だけど、ただでさえ軽音部に入れたのは俺のおかげ、なんて言っ
てるんだ。音楽に興味を持ったキツカケまで俺だったってなったら、
どうなると思う？」

「唯の中で、あなたはかなり大きな存在になるでしょうね。良かったじゃない」

「良いわけあるか！」

つと、思わず声を張り上げてしまった。

あの和が、肩が跳ねるくらいに驚いていた。

あの和が。

「あ、悪い・・・」

「大丈夫よ。むしろ私の方こそ、何か気に障るような事言っちゃったかしら？」

「いやいや、そういう訳じゃ・・・」

ならどうして？と怪訝な顔を見せる。

一度深呼吸をして、昂った感情を抑えてその疑問に答える。

「もし平沢がその事を知ったら、あいつは俺に期待して、感謝して、俺を尊敬するんじゃないか？」

「ま、確かにそういう子ね」

「俺はあいつにそう思われる様な人間じゃないし、思われていい人間でもない。それに、その期待と感謝と尊敬の念に応えられる自信もない。あいつを落胆させるだけだ」

一度も二度も拒絶したくせに。

それでも近寄ろうとしてくれた平沢の優しさに甘えて。
その上に感謝されて、期待されて、尊敬されようつてのか？
虫がよすぎる。

平沢に心から感謝してるからこそ。
間違つて欲しくないし、これ以上間違いたくない。

「・・・あなたは、少し自分を卑下しすぎよ。謙虚を通り越して、
盲目ね。何も見えていないわ。自分の事も、唯の事もね」

どういう意味だ？

通り越すも何も、まず謙虚に言つたつもりはない。
それに卑下したつもりも。

俺という人間は、本当にその程度なんだ。

もちろん、これから変わろうとしてはいるんだけど。

今はまだ、自分を認める事も、誉める事も出来ない。

だけど、盲目つてのはまああめを得ているかもな。

でも、見えていないんじゃない。

自分が嫌いだから、自分を見ていなかっただけだ。

しかし、平沢の事を見えていないつてのはどういう意味だろうか。

あいつは見てて面白いし、何だかんだで見習うべき所も多々あるから、よく観察してはいるのだが。

「唯にとつてあなたは、もう十分に大きな存在なのよ」

「部活に入る時に、背中を押したただけでか？」

「いいえ、その前から・・・友達になった瞬間、かしらね」

「友達つてただけでか？」

「ただの友達じゃないのよ。唯にとっては、初めての男友達だもの」

「えっ、マジで？」

「ええ。中学は女子校で、小学校の時は・・・ね」

和はいったん悩むそぶりを見せ、だが意を決したように続ける。

「ほら、唯みたいなのトロくてドジで、失敗ばかりの子って、精神的に幼い男の子が一番嫌うタイプじゃない？」

ああ、確かに。

高校生の今でさえ、あんなにも天然で、ドジで、トロいから。幼き日の平沢は、もって凄いのかも。

そんな平沢を、小さい男の子が受け入れられるだろうか？

否、難しいと思う。

少し大人にならないければ、平沢のミスを笑って済ます事は出来ないだろう。

悪気のない純粋な笑顔を見て、仕方ないで済ます事は出来ないだろう。

「だからあの子、男の友達が今までいなかったのよね。それどころか、小学生の頃に軽度のイジメにあっちゃってね」

「なっ・・・マジかよ」

「本当にちょっとだけよ。私がすぐに止めさせたもの」

和さんパネエっす。

でも小さい時、特に小学生くらいだと女の子の方が力も勢力もあり

そうだしなあ。

その中でも和は学級委員とかでかなり上の地位にいたんだろうな。

「それから、唯もあんまり男の子と話さなくなっちゃって。中学も、女子校に行こうって言ったらすぐに賛成してくれたわ」

平沢の過去を聞いて、気になる事が一つ。

「・・・で、その男嫌いだった平沢が、あんなにしつこく俺につきまとして来たのは何でだ？」

「今まで男の意地悪な部分しか見てなかったあの子にとって、親切にされたのが衝撃的だったんでしょ」

「親切って・・・ああ」

あの、生徒手帳か。

たったあれだけでも、平沢にとっては世界が変わる程の出来事だったわけだ。

俺のちよつとした気まぐれが。

平沢を変えたのか。

「だけどその後、俺は平沢にひどい事言っちゃって、拒絶したんだぞ？」

「これ以上逃げたくなかったんですって。それと、救いになりたいって」

逃げたくなかった。

それはつまり、男のいない中学に行った自分を、恥じているのだから

うか。

それとも後悔しているのか。

何にせよ、あいつは変わろうとしていたんだ。

あいつのその決意に、努力に。

俺はきっちり救われている。

あいつのおかげで、俺も変わろうと思った。

あいつのおかげで、人の暖かさを知った。

人の笑顔は、こんなにも暖かいのだと。

「・・・それ、勝手に話していいのかよ？」

「隠そうなんて思う訳ないでしょ、あの子が」

だよな。

「俺も、話すべきかな」

「それはあなたのタイミングで話すべきよ。あなたと唯の問題でしょ」

俺と平沢の問題か。

それでも、何か和は良い案を出してくれそうなんだよな！。

万能というか、何というか。

全てを解決してくれそうな。

そんな安心感さえある。さながらドラえ。んの様だ。

「ちょっと際どいわよ、それ」

また心を読まれた。

というより、思考さえも正そうとしているのか、この生徒会員は。

心を読まれてというより、俺の考える事を知ってるみたいだ。

「わかりやすいしね、あなたは」

「やっぱり知ってたのか！」

「ええ」

「お前は何でも知ってるなあ」

「何でも知らないわよ。知ってる事だけ」

「このネタも知ってたか！」

思ってる以上に凄い奴だ。

「さ、そろそろ戻りましょ。授業始まっちゃうし」

「ああ、そうだな」

席に戻る俺達。

随分と長い間話してしまった、授業まで時間がない。

急いで授業の準備をする。

と、そこに、

「ねえねえ、今の時間どこ行ってたの？暇だったんだよね？和ちゃんもないしー」

椅子に膝を乗せ、こちらを向いて平沢が話しかけてくる。

「その和と話してたんだよ」

「えー！？ずるうーい！私だけ仲間外れはやだよー！」

ずるいつて何だ。あと仲間はずれって。

「ちょっと話してただけじゃねえか。仲間外れにした覚えはねえよ」

「ほんとぉ？」

と、心配そうに訊ねてくる。

そんなわけないのに。

馬鹿だな、こいつは。

それと天然で、ドジで、アホで・・・

「本当だよ。それと・・・」

良い奴だ。

「ちゃんと、救われたから。ありがとな」

「え？何の話？」

「さあな」

その後も何の話かとしつこく訊かれたが。
話すべきは、きっと今じゃない。

「今度は、私と二人でゆっくり話そうね！」

と、平沢にそう言われ。

こいつは、いつかちゃんと話そうと俺がしているのを知ってるんじゃないかと、一瞬思ったけど。

ニコニコしている平沢を見て、そんなわけないと考えを改める。そして、

「ああ、そうだな」

と、笑顔で返した。

過去！！（後書き）

自分の文才の無さに泣いた回。
全然伝えたいように書けない。

家族！！（前書き）

かなり長めになってしまいました。
ともあれ、憂ちゃん登場です。憂ちゃんは良い子！

家族！！

連休前の放課後。

俺は、連休の間の食料を確保すべく、スーパーに来ている。

今日のバンド練習は休みである。まあどうせ自主練するんだけどな。軽音部はというと、平沢のギターを買いに行くらいしい。やっと。

まあ平沢自身が入部を渋ってた上に、楽器を購入する費用を得るために皆でバイトをやってたらしいな。

しかし、ギター代の為に皆でバイト、か。いい人達みたいでよかった。

どこか保護者じみた事を思いつつ、ひとまず今日の晩飯から決めていく。

(とりあえずカレー、だな。一回作っておけば何度でも食えるし)

安易かつ効率的な発想で今日の、むしろ連休の間の献立が決まった。カレーに飽きたら外食すればいいだけだし。

手間のかからん料理なら家に残ってる食材だけでなんとかなるだろう。そう思い、カレーの材料をレジに通す。

支払いを済ませ、買った物を袋に詰める。

その横で、何かふよふよした物が視界に入ってきた。

横目で確認すると、それは後ろで結ばれた髪の手、俗に言うポニーテール。

制服に身を包んだ少女だった。

学校帰りにおつかいかな？感心感心。

ホッとした気分で、どんな子なのかと顔を横目で確認してみる。すると、

「……えっ、平沢？」

「は、はいつ!？」

ビツクリ仰天、そこにいたのは平沢だった。

いきなり名前を呼ばれた平沢もビツクリ仰天し、今だ困惑した表情でこちらを見ている。てか何か怯えてね？

というかこの子、平沢じゃないよな？冷静に考えると。

制服違うし。

髪型も違うし。

何か反応も平沢っぽくないし。

何より、あの平沢がおつかいなんかする訳がない！

でも平沢って呼んで、反応したんだよな。

はて？

「あ、あの・・・」

おっと。

考えに耽りすぎて、放ったらかし状態になってしまった。

「ああ、悪い。人違いだったみたいだ」

おそらく、平沢に良く似ていて、姓が同じなだけの偶然だろう。

気にすることはない。

「いえ、あの、もしかして姉の・・・平沢唯の、お友達でしょうか？」

ですよー。いやー、薄々そうじゃないかとは思ってたんだよ。

似すぎだし、同じ平沢って事は姉妹に違いない!ってね。H A H A

H A !

ひとまず確認を取ろう。

「えと・・・平沢唯の、妹さん？」

「はい！平沢 憂と申します。姉がいつもお世話になってます」

と、平沢妹は、平沢に負けず劣らずの笑顔で自己紹介してくれた。
しっかし、まあ。

何だこの礼儀正しさは。
ホントに平沢の妹か？

「あの、もしかして上崎 晃さんですか？」

「えっ、そうだけど・・・なんで」

知ってるんだ？と俺が言い終わる前に

「やっぱり！」

と、先程よりも眩しい笑顔を放って、両の掌を合わせて言った。

「お姉ちゃんから色々聞いてます、とっても面白くて良い方だった
！一度お会いしたかったんですよ〜！」

何これ？

何で俺、スーパーの片隅で、今日初めて会った子にキラキラ笑顔で
大絶賛されてんの？
何かめちゃくちゃ恥ずかしいんだけど！

「わゝ、写真で見るよりカッコイイですね！」

やめて！やめてくれ！

どういう反応すればいいかわかんじゃないか！
つつか写真で！

平沢の奴、いつの間に撮ってやがった！

「あ、あのさ平沢妹・・・」

「あ、気軽に憂って呼んでくださいね！」

「わかった！わかったから！えっと、憂ちゃん、とりあえず外に出
ようか！」

いったん話を区切り、半ば無理矢理連れ出す。

「つたく、平沢はいつも家で一体何を話してるんだ！
何で俺の話題なんか出てくるんだ！

「つつか何で俺の写真なんか撮ってたんだ！
わけがわからないよ！」

「あの、突然どうされたんですか？」

そう俺に訊ねてくる憂ちゃん。

「あのなあ、今日初めて会った子になあ、いきなり良い人だのカッ
コイイだの言われたらなあ、お前、あれだぞ？な？」

「・・・あつ、晃さん、もしかして照れてます？」

「バツ、バカヤロウ！」

「あはは、可愛いんですね、晃さんって！」

「もうやめて！本当に勘弁してくれ！恥ずかしいから！マジで！」

結局、落ち着くのに大分時間がかかってしまった。

その間、憂ちゃんはずっと笑っていた。

男が恥ずかしがるのがそんなに面白いのだろうか。

もしくは、俺のその姿が滑稽なのか。

わからない。

ただ言えることは、笑っている憂ちゃんはとても楽しそうだ。
笑顔が似合うのは、やはり平沢の血筋か。

「ふふふ・・・はあ」

ひとしきり笑い、ようやく収まった様だ。

「落ち着いたか？」

「あつ！すいません、笑ったりして！失礼ですよ・・・」

さっきまでとは打って変わって、礼儀正しく頭を深々と下げてる。

まあ別に笑われた事に対して怒っちゃいないが。

失礼だとも生意気だとも思わないし。

「大丈夫、気にしちやいないよ」

言いつつ、憂ちゃんの頭の上に、手をポンポンと置いてみる。

普段ならば当然こんな事はしないのだが。

なんだろう、この子は不思議な魔力みたいな物がある。

優しくしたくなるような、守りたくなるような。

これが妹の力か、未恐ろしい。

「あつ・・・えへへ、ありがとうございます」

少し頬を赤くしながら、満面の笑みでお礼を言うてくる。

別に感謝される様な事はしてないんだけど・・・。

・・・何だこの感情は。よくわからん。

よくわからないけど、とりあえずそのまま撫で撫でしてみる。

「あう・・・あの、晃さん・・・」

そう言われた瞬間、ハッと我にかえり、手を離す。

「つと、悪い・・・」

「あ、いえ！全然嫌とかじゃないんです！ただ・・・」

「ただ？」

「あの、もし私にお兄ちゃんがいたら、こんな感じなのかな、って・・・」

と、言うてくる。

上目遣いで。

モジモジしながら。

少し恥ずかしそうに。

・・・だから何だこの感情は。よくわからん。

よくわからんけど。

なんだろう、今もの凄く。

もの凄く！

この子を抱きしめたい！

でも駄目だ、その一線を超えたら駄目だ！

何が駄目って、もちろん人間としていきなり抱きついたりするのは良くないし！

憂ちゃんも俺なんか抱きつかれるのは嫌だろうし！

でもそういう駄目じゃなく！

もし抱きついたりなんかしたら、多分あれだ、戻れなくなる！

色んな意味で戻れなくなる！

だから駄目だ、耐えるんだ、我慢だ辛抱だ忍耐だ！

そうして俺が悶絶していると、

「あの、晃さん？大丈夫ですか？」

凄く心配された。

「あ、ああ。大丈夫大丈夫」

もう少しで大丈夫じゃない人になってたかもだけど。

ふう、危ない危ない。

気をしっかり持たないと、マジで犯罪者になりかねん。

白昼堂々中学生に猥褻行為を働く高校生。一面はこれで決まり。

ついカツとなってやった、後悔はしてない。とか勝手に書かれてな。彼は友達が少なかった様です、とか報道されるんだ。余計なお世話だよ！

とにかく、冷静になるんだ。

もう二度と妹の魔力なんぞには屈しない。

鉄の心だ。

「やっぱり、私のお兄ちゃんなんか嫌ですよね」

と、顔は笑ってるけど、残念がってるというか、落ち込んでるというか。

そんなのが明らかに見て取れる表情で憂ちゃんは言った。

そりゃあ、なあ？

別に嫌とかじゃないんだけどさ。

いきなりお兄ちゃんとかって言われてもなあ。

だからと言ってはつきりと伝えれば、この子を傷つけてしまうかもしれない。

やんわりと伝えるんだ、慎重に。

とりあえず憂ちゃんの両肩を掴む。

そして眼をまっすぐ見据えて、

「絶対なる（キリッ）」

そう宣言した。

不可能なんてない。

過去を改変してでも、記憶を操作してでも、神を従えてでも、俺はこの子の兄になるんだ。

奇跡も、魔法も、あるんだよ。

「ふふっ、ありがとうございますね、晃さん。冗談でも、元気出ました」

なっ、冗談だと！？

あ、いや、冗談だよな？

うん、冗談だ冗談。冗談のはずだ。

冗談、ですよ？

「それじゃ、そろそろ行きますね。もう陽も暮れますし」

「ん、そうだな。にしても・・・」

憂ちゃんの手元に視線を落とす。

とにかく、凄い量だ。

特に調味料が凄い。

重量的にもスペース的にも大半を占めている。

「一気にそんな買う必要あったのか？」

「色々切らしちゃって・・・えへへ、つい買いすぎちゃいました」

ついて。

平沢同様、少し抜けているのか？

まあもしこれが平沢なら、調味料が全てお菓子に変わってるんだろうな。

「おつかいで買いすぎてもいいのかよ？」

「あつ、おつかいじゃないですよー！子供扱いしてー！」

「へっ？じゃあ何、これ私用？全部？」

どういうことだ？

「ぷっ、もう、そんな訳ないじゃないですか！平沢家のお台所は、私が管理してるんですよ」

「あ、ああ。なんだそーいう事か」

そりゃそうか、ちょっと考えれば分かることだ。

すんごい間抜け回答をしてしまった。

べ、別に狙ってないんだからね！

しかし、ホントに重そうだ。

というより、重いのだろう。

持って歩く憂ちゃんの足がフラフラしている。

・・・仕方ない。

「ほら」

と、手を差し出す。

はい？と聞き返してくる憂ちゃん。

「重いだろ、俺が持つから」

「ええ！？そんな、悪いです！」

「いいから。ていうか全然進めてないし」

「ダメです！それに、晃さんご自分の荷物もあるじゃないですか！」

「じゃあ、はい」

と強引に俺の荷物と憂ちゃんの荷物を交換する。

俺の荷物はカレーの材料だけで大した重さじゃないはずだ。

「あうう、すみません・・・」

「いいよ、別に。しっかし、料理だけじゃなくて買い物も憂ちゃんがやってんのか」

「ていうか、家事全般を私が受け持ってます」

「へー。親は忙しいのか？」

「はい。海外を飛び回って、ほとんど家にはいませんね」

「なるほどねえ。って、じゃあ平沢は何やってんだよ」

「あ、えと、お姉ちゃんは・・・ほら、部活で忙しいですし」

「それつい最近の話だろ。今まではどうだったんだよ」

「い、今までも色々と忙しかったんですよ・・・」

わかる、分かりやすすぎる。

この子、あんまり嘘がつかないな？その辺も平沢そっくりだ。
やれやれ、あいつめ。

家事は妹に任せっきりか。

「もしかして、平沢にやらされてる・・・わけないか」

「ち、違いますよ！ただ、お姉ちゃんに手伝ってもらって、その・・・」

言われ、その場面を想像してみる。
浮かんで来た光景は。

「・・・何か、逆に仕事が増えそうだな・・・」

「」明察です・・・」

憂ちゃんの表情を見る限り、想像した様な光景が実際にあったのだろつ。

「毎日ご苦労様だなあ」

「いえ、大丈夫です。お姉ちゃんのお世話をするの、好きですから」

「甘やかし過ぎじゃないか？それに、少しはあいつにも手伝わせないと、あいつが駄目人間になっちまうぞ」

「そ、そうでしょうか・・・」

「今は出来ないけど、いつかはあいつだって出来るようになるかもしれないだろ？」

料理上手でお掃除上手で世話上手なテキパキした平沢唯。

うん、ないな。想像出来ない。

イメージすらさせないとは、恐ろしい奴だ。

「だけど、お姉ちゃんが怪我しそうで・・・」

「その怪我を乗り越えて成長するもんだろ？料理なんかは特にそうじゃないか」

失敗は成功の元とは良く言ったものだ。

「晃さん、お料理されるんですか？」

「ああ、一人暮らしだからな。親の事情はそつちと大体一緒さ」

家の事を聞かれるのは面倒なので先に釘を刺しておく。

『親の事は聞くな』と。

「そうなんですか。今日はカレーですか？」

と、俺の袋の中身を見て訊ねる憂ちゃん。

料理する人なら材料だけでわかるもんだ。

ま、カレーは誰でもわかるかな。

「今日つつつか、連休の間はほとんどカレーだな」

「ええ！？駄目ですよ、栄養偏っちゃいますし」

「男はそんなの気にしないのさ。誰かに作るわけでもなし、適当でいいんだよ」

料理は嫌いじゃないけど。むしろ好きな部類だが。

誰かに作るとき以外の料理ってのは、意外と作りがいがないもんだ。

「じゃあ、今日はウチで一緒にしませんか？二人分も三人分も、作る手間は変わりませんし。それに、お姉ちゃんも喜んでくれますし！」

最後の方に力が入っていたのは気のせいだろうか。

「お邪魔したいとこだけど、遠慮しとくよ」

一日分の食費が浮く上に、料理作る手間もなくなる。
こんなおいしい話はない。

けど、さすがに行く訳にはいかないよなあ。

女二人の家に、男一人上がり込んで居心地悪そうだし。

大体、二人分も三人分も変わらないって。

そりゃ嘘だ。変わらない訳がない。

単純な1・5倍にはならないかもしれないが、増えることに違いはない。

それに食後の片付けも。

洗う食器の数も増える訳で。

もちろんホントに行くなら手伝うけど。

憂ちゃんが俺に気を使ってる事は間違いない。

「えー、どうしてですか？」

「憂ちゃんに悪いし、それに平沢にも迷惑かもしれないし」

「お姉ちゃんは絶対喜ぶと思いますけど・・・」

いや、どうだろうか。

平沢も、家の中に入れるのは嫌って言うかもしれないしなー。
見られたくない物もあるだろうし。

「それに私も、もつと晃さんとお近づきになりたいですし。それとも晃さんは、私なんかと仲良くなるのは嫌ですか？」

「いや、それだけは絶対じゃないけど・・・」

「本当ですか！？それなら来てくださいますよね！？」

上手い。

これでこの子の中では、俺が断る理由が無くなった訳だ。

それに、今から新しい理由を上乗せして断つても。

やっぱり私なんかとは・・・と言ってくるに違いない。

計算高い、なんて恐ろしい子！

それとも、これを素でやっているのだろうか。

「良かった、いきなり遊びに来てなんて言っただから、嫌われちゃったかと思いました」

うん、後者みたいだ。凄い。

平沢とは違う意味で天然だ。

「はあ・・・一応平沢にも連絡入れとくんだぞ？」

帰ってきていきなり俺がいたらびっくりしそうだし。

心の準備をさせてやらねば。

「その必要はありませんよ？」

「え、なんでだよ」

「ほら、あそこです」

と指さした方向に、いた。横断歩道の向こう側に、帰宅中の平沢が。

俺と憂ちゃんは、その横断歩道の先で平沢を待つ。

背にギターを背負っている。なんか間抜けな背負い方だが、あいつにピッタリだ。

しかし、ボーツとしてるなあ。何かにぶち当たりそうだな。

と思った矢先に、フラついて走行中の自転車と激突しそうになる。

間一髪、自転車の方がそれを回避してくれた。冷静に状況を説明しているが、正直かなりヒヤツとした。

危険を回避してもらった平沢だが、そのフラついた勢いでそのまま屍餅をつく。

バツ、とギターの心配をするが、幸いギターは何ともないようだ。間抜けな背負い方のおかげか。

そのまま立ち上がり、その場でスカートの汚れをはたく。

冷静に状況を説明しているが、正直かなりハラハラしている。

何故なら、信号が点滅していて、もうじき車道の信号が青になるからである。

それに気づかぬ平沢は、またポケーつと、トロトロと歩き出す。案の定、発車したくても出来ない車にクラクションを鳴らされ、ビクツと身を縮ませる。

その場で車にごめんなさいごめんなさいと頭を下げる。

そんな事いいから早くどいてくれ、と言わんばかりに一層大きくクラクションを鳴らされる。

ご、ごめんなさい！と言いながらようやくこちらまでたどり着いた平沢。

さて、苦労した平沢を労ってやるか。

「危なっかしいんだよボーツとするなタラタラ歩くな周りをよく見る！」

「ごっつ、ごめんなさいっ!？」

「お姉ちゃん、お疲れ様」

「あれ、憂だ。ただいま」

「ふふ、まだ家じゃないよ？」

「憂の元に辿り着いたから、ただいまで合ってるよ」

「えへへ、そっかあ」

「甘い！甘いよ憂ちゃん！然るべき時に叱ってあげないと平沢はずつとこのままだぞ！？」

「お姉ちゃんはこのままで良いと思うな」

ま、まずい。

眼がやばい。

まるで天使でも見るような、そんな眼で平沢を見ている。

そうか、やっと理解した。

この子、親バカならぬ妹バカだ。お姉ちゃん大好きっ子だ。

平沢のこういったドジな姿や、家でゴロゴロしてるのを見て。

多分この子、萌えてやがる！

いや、それじゃ済まない。蕩れてやがる！

「あ、アキ君だ！昼ぶり」

「だから挨拶のタイミングがおかしい！」

「蕩れるって何？」

「心を読むな！」

「あれ？ていうか、なんでアキ君と憂が一緒に？」

「今更かよ！」

「あ、二人共々見て見て！」

「ギターだろ！見りやわかる・・・」

「新しい髪留め買ったんだ！どうどう、似合う？」

「ギターは犠牲になったのだ！」

「お姉ちゃん可愛い」

「でしょでしょ？」

「俺がおかしいのか！？ついていけない俺がおかしいのかよー！！」

「あ、そう言えばやっとギター買えたんだ」

「もついいよー！！」

「こんなの絶対おかしいよ！

閑話休題！

「へー、スーパーで偶然会ったんだ」

「うん。お姉ちゃんの言ってた通りの人だね、晃さんって」

「あー！そうだ平沢、お前いつの間に俺の写真なんか撮ったんだよ！」

「え」！？えと、アキ君が机でお昼寝してる時に、こっそり・・・」

「寝顔だと！？ちよつと見せろ！」

「やだやだ！見せたらアキ君絶対消せって言っじゃん！」

「当たり前だろ！つつか見なくても消させるわ！」

「じゃあやだー！」

「ミセナサイ」

「あう・・・はい・・・」

正義が勝った瞬間であった。

ともかく、件の写真を見してみる。

おうふ、ヒドイ顔である。憂ちゃんの言ってた事も納得だ。

写真よりカッコいいだっけ？当たり前だ。

この写真よりカッコ悪かったらショックだ。

「自分の手で削除しなさい」

「はい・・・」

これでよし。

しかし、油断も隙もあつたもんじゃない。

これから学校で寝る時は顔を隠そう。

「あ、そうそう。お姉ちゃん、今日は晃さんがウチで一緒に晩ご飯食べてくれるんだけど、いいよね？」

「え、アキ君ウチ来るの！？」

「ああ、都合悪いなら別に・・・」

「悪くない、全然悪くないよ！むしろ都合良すぎて困るくらいだよ！」

「そ、そうか・・・」

「良かったね、お姉ちゃん」

「うん！ねえねえ、何して遊ぶ！？」

「ご飯食べる、かな」

「その後だよ！」

「帰る、かな」

「ええ〜！？つまんないよお」

「ギターの練習でもやってろよ」

「やるけどお・・・そうだ、アキ君も一緒にやらない？」

「バーカ」

やるんだよ。自分の家で、自分のギターでな。

とは知らぬ平沢は、だよなーと口を尖らしている。

正直、平沢と一緒に練習するのも良いとは思ってる。

だけど、俺は未だに話せずにいる。

言ってしまう楽になるかもしれないけど。

自分から『あのライブやってたの、実は俺なんだ』と言うのも恩着

せがましいし。

いつか話す時が来るだろう。

そんな言い訳をしながら先伸ばしにしている。

・・・違うな、俺は逃げてるんだ。

話してしまえば、平沢は俺を憧れの、尊敬の対象にするだろう。

これは自意識過剰とかじゃあ決してなく。

平沢唯が、そういう人間なんだ。

まだ知り合って1ヶ月やそこらだが、わかる。

何故なら、平沢は隠す事をしないから。

ありのままの自分を見せてくるから、本質がわかりやすい。

そんな平沢が俺を、俺なんかを尊敬する。

俺はそれから逃げている。

その期待に応えられず、失望されるのを恐れてるんだ。

そんな自分が心底嫌いだ。

平沢はこんなにも、自分を見せて、俺を知ろうとしてくれているのに。

そんな平沢から逃げて、隠して、壁を作っている俺が、大っ嫌いだ。

「晃さん？着きましたよ？」

「ん？あ、ああ」

「じゃーん！これが平沢家です！ふんすっ」

「なんだそのドヤ顔は・・・」

しかし、確かにドヤ顔したくなるくらい、立派な家だ。

「つつか、近いな」

「何がです？」

「俺ん家から」

「え、そうなの？」

「ああ。交差点一個越えるだけだな」

「そーなんだ！じゃあいつでも遊びに来れるね」

「俺にその気があれば、な」

俺が自分から来ようと思うかは怪しいところだが。

「ささ、上がって上がってー」

「ああ、お邪魔します」

「えー、邪魔なんかじゃないよー」

「定型文にツッコむなよ・・・」

招かれるまま、中に入る。

おお、こりゃ広いリビングだ。

リビングと言うより、家全体が広めだ。

二人だけで寂しくないのだろうか。

まあ、平沢と憂ちゃんなら、楽しくやってるだろうな。

「ゆっくりしてって下さいね、晃さん。私は晩御飯の準備しますから」

「あ、俺も手伝うよ」

「駄目ですよー、晃さんはお客様なんですから」

「いや、でも・・・」

「お姉ちゃんの相手、お願いしますね」

「それは・・・いや、やっぱり悪いよ」

「んー、じゃあこうしませんか？次の機会には、晃さんが私とお姉ちゃんにご馳走して下さい」

「そりゃあ、まあ・・・構わないけど」

「だから、今日のところは私に任せてくださいね」

そう言つて、憂ちゃんはキッチンに向かった。

しかし、やっぱりなんか、上手いというか巧みというか。

結局俺を手伝わせず、しかも次の約束まで取り付けてしまった。しっかりしてるなあ。

「アキ君アキ君！人生ゲームやろうよ！」

しかしこいつは。

妹があんだけ働き者なのに、遊ぶ事しか頭にないのだろうか。しかも二人で人生ゲームって。

「人生ゲームってせめて三人からじゃないか？」

「え？でもいつもは憂と二人でやってるよ？」

さすが憂ちゃん。

姉の要求が変だと知りつつ、笑顔で了承しているんだろうなあ。本当に良い子だ。

気が利く上に働き者で、さらに礼儀正しいと。

「お前、妹に良いとこ全部取られちゃったんじゃないか？」

「あ、なんかそれ前にも言われた気がする・・・」

「いや、時系列的にはまだ先の話だと思うけど」

「メタイよ、アキ君・・・」

「そうか、悪い悪い。でもお前もあんまりメタイとか言っくなよ？ふんすっ」

「それ私の！っていうか使い方おかしいし！でもドヤ顔は完璧！」

などと雑談しつつ、何だかんだ二人の人生ゲームを楽しんだ。

何ゲームか消化してる内に晩飯の準備も整ったみたいだ。

三人で食卓を囲む。

「それじゃ、いただきまーす！」

「ふふ、召し上がれ。晃さんもうござ」

「ああ。ありがとな、憂ちゃん」

「いえいえ。あ、感想聞かせてくださいね？」

「とても美味しいです」

「もう、まだ食べてないじゃないですか」

「あ、そうか。んじゃ、いただきます」

「はい、どうぞ」

手を合わせ、食卓に並んだ料理を見渡してみる。

メインはハンバーグ、その横に海鮮サラダ、サブで少量のパスタ。全て綺麗に仕上がっていた。

次に、一品ずつ味をみる。

うん、これやばい。

めちゃくちゃ美味い。

どこのシェフですか？

「すげえ・・・」

「えへへ、どうですか？今日は一段と美味しく作れたと思ってるんですけど」

「すげえ美味い。美味すぎて、どんな感想を言っても安っぽくなっちゃまうよ」

「本当ですか！？ありがとうございます」

「料理、好きなのか？」

「はい！いつもお姉ちゃんが美味しいって言ってくれますから、それだけで次も頑張ろうって思えるんで」

「もう憂ってば、恥ずかしいよう」

「えへへ、いつもありがとう、お姉ちゃん」

「それはこっちの台詞だよ。いつもありがとう、憂」

「うん、どういたしまして」

「えへへ」

「えへへ」

「・・・」

なんて恥ずかしい会話をするのだろうか、この姉妹は！
これが日常茶飯事なのか？

だけど、不思議と聞いて不快感は無いんだよねー。

平沢姉妹の人柄だろうか。

恥ずかしいとかクサイとかより、暖かいという印象が強い。
何故だろう。

こいつらが仲良しだからか？

それとも、これが家族の温もりってやつか？

家族・・・か。

「アキ君？」

「っ、な、なんだ？」

「どうしたの？ボーっとして」

こ、こいつにボーっとしてるとか言われなくなかった！

いやいや、そこはどうでもいいか。

つまり、周りにもわかるほど、平沢にさえわかるほど、俺は考え事をしてたのか。

いかんいかん、あんな過ぎた事を。

「なんでもない、ちよつと考え事」

「・・・アキ君、なんか元気ないよ？」

なっ・・・

平静を装ったつもりだったのに。

声に出てたか？

顔に出てたか？

それとも、平沢は意外と人の感情を読みとる事に長けているのか？
とにかく、まずい。

誤魔化さなければ。

こんな事、話せるわけがない。

「何言つてんだよ。普通だぞ？」

「・・・私なんかには、話せない事？」

やめろ・・・

「だから、なんでもないって」

「嘘だよ、顔に出てるもん」

やめてくれ・・・

「・・・お前に、何がわかんだよ」

「わからないから聞いてるんだよ」

これ以上・・・

「だからっ・・・!」

「あ、あのっ!」

「!?!」

「私、食器洗ってきます!」

「あ、うん・・・」

「あと、量が多いので、晃さん手伝ってくれませんか?」

「あ、ああ・・・」

憂ちゃんが手伝ってくれと自分から言うはずがない。
きっと、俺に気を使ってくれたんだろう。

憂ちゃんが間に入らなければ。

俺は何を言おうとした?

平沢は、ただ優しいだけなのに。

何とかして、俺を元氣付けようとしてくれただけなのに。

勝手に昔の事を思い出して。

勝手にへこんで。

拳げ句、八つ当たりか。

最低だ。

「それじゃお姉ちゃん、ちょっとだけ待っててね」

「うん・・・」

俺と憂ちゃんは台所に向かい、平沢はリビングのソファへ。

それにしても、なんて暗い顔をしてるんだ。

まだだ。

また俺が、平沢にあんな顔をさせてしまった。

最悪だ。

「気を悪くしないで下さいね」

「え？」

「お姉ちゃんって、困ってる人がいたり、悩んでる人がいたら、何とか力になれないかって、自分も必死になっちゃう人なんです。昔からそうやって、よく空回りしちゃうんですけど」

「・・・大丈夫、わかってるよ。それに、さっきのは俺が全面的に悪い」

「悪くなんかないですよ。誰にだって、秘密や触れられない事ってありますし」

「そう・・・かな」

「そうですよ。でも、晃さん？」

「ん？」

「家族団欒の場で暗い顔をするのは、NGですよ？」

「いや、家族って・・・」

「この家で一緒に食事をしてる時は、晃さんも家族の一員ですよ。それに、言ってくれましたよね？」

「え？」

「私のお兄ちゃんに、なってくれるって」

この子は・・・この姉妹は、なんて暖かいんだろうか。
さつきまで、心の中で嫌なものがグルグル渦巻いていたのに。
今は、スッキリしている。

この子の笑顔に浄化されてしまったみたいだ。

「ありがとな、憂ちゃん」

「どういたしまして、お兄ちゃん」

さて、元気も出させてもらっただし。
ちゃんとやる事やつとかないとな。

「ごめん、ちょっと行ってくるよ」

「はい、いつてらっしゃい」

申し訳ないが、食器洗いを憂ちゃんに託し、リビングのソファアへ向かう。

平沢は、ソファアにうつ伏せになり、顔をクッションに埋めていた。ま、まさか泣いたり・・・してない、よな？

「平沢」

と、俺が呼んだ瞬間、ガバツと勢い良く顔を上げる。
目は少し赤くなっている・・・が、泣いた様子はない。
良かった・・・

「アキ君！あの、さつきは」

その先は言わせない。

それは俺が言つべき言葉だ。

「さつきは、本当に悪かった」

「ごめんなさ・・・えっ？」

「だから、頼むから・・・そんな顔、すんな」

笑ってくれ、とはさすがに恥ずかしくて言えないけども。

「でもでも、私が無神経に・・・」

まだ平沢は笑わない。

ふむ、どうしたものか。

とりあえず別の事を・・・そうだ。

「平沢、人生ゲームやろうぜ。憂ちゃん入れて、三人で。つつかやるぞ」

「ふえ？なんでいきなり・・・」

「なんだよ、やんねえなら憂ちゃんと二人でやるぞ？」

「や、やるやる！ヤッテヤルデス！」

「それはお前の台詞じゃねえよ！」

「え、じゃあ誰ののかな？かな？」

「それはまだ言えない・・・ってヤメロオ！」

「やめないよ？全てはオヤシロ様が決める事だもん」

「ウッディ！」

「あはは、何それー！」

「この流れで何それとか言われるとは思わなかったよ！」

ともあれ。

ようやく・・・笑ってくれた。

これで自分を許そうとも、許されるところもないけど。
ひとまず、一件落着かな。

馬鹿な雑談をやってる内に、憂ちゃんも後片付けを終えたようだ。
三人でゲームを始める。

最中に、要望があつたので携帯の連絡先を交換した。

「平沢姉妹の連絡先を手に入れた！」

「メールを送るにはMPが足りません」

「魔法なのかよ！」

「まあ、違うよー。メールポイントだよアキ君」

「なんだ・・・いや何だそれ！」

「そうだ、お姉ちゃん。晃さんの写真送ってー」

「へ？写真ならさっき消したじゃ・・・」

「いいよー。はいっ」

「ありがとう」

「ナズエモツティルンデイス！？」

「あ、オンデ・・・オンド・・・何語だっけ？」

「実はさっき晃さんが消したの、私が見たのと別の写真だったんです。私が言ってたのはこっちですよ」

と言って見せてくれたのは、登校中の俺だった。

「こんなんいつ撮った!？」

「登校中に偶然見かけたから、ついね!ふんすっ」

「盗撮じゃねえか!つつか何で誇らしげ!？」

「いいじゃん別に」

「ふざけんなっ!」

「ちえゝ、ケチイ」

「てめえなあ!」

「ごめんねっ(テヘペロ」

「うぜえ!」

「ああん、ひどうい!」

「あれ、晃さんの肩に何か写ってる・・・」

「嘘だろ!？」

「あ、ただの手でした」

「嘘だろお!？」

「はい、嘘です」

「てめえ！」

「ごめんね、お兄ちゃん」

「つたく、しょうがないなあ」

「なんか憂に甘くない!？」

「よしよし」

頭を撫でてみる。

「えへへ」

効果は抜群だ！

「ズルい！私も！」

頭を差し出す平沢。

「よしよし！」

頭をガッチリ掴んで大きく揺すってみる。

「え、へ、へ、」

どこかの扉が開いたようだ！

「なんで!？」

「心を読むな！」

ああ、すげえ落ち着く。

さつき女二人の中に男一人だと居心地が悪いつて言ったけど。

この二人は例外らしい。

この空間は、暖かすぎる。

さつき険悪な雰囲気を作ってしまったのを、一層後悔させられる。

「なあ、さつきの話だけど・・・」

この二人に、気まずさなんてのは無縁だろうけど。

だけどやっぱり、一応言っておかないと。

そう思い、楽しそうに話している二人に話しかける。

「あれ、お前達には話せない、とかじゃないから。誰にも・・・話せない事なんだ」

そう、誰にも。

晴や悠にさえも、話していない事。

俺の、家族の事。

「うん、わかってるよ。だから私も、さつきは無理に聞こうとしてごめんね？」

「やめろよ。それはお前の良い所でもあるんだから」

「え、そ、そうかな・・・」

「お前の、そういう他人の為に頑張ろうとする所。俺は結構好きだ

ぜ」

「え！？あ、ありがと・・・」

「？なんか顔赤いぞ？」

「な、なんでもないよ！」

「照れてるお姉ちゃん、可愛い」

「もう、憂！」

「可愛いですよ、晃さん？」

「ん？まあ、可愛いんじゃないか？」

「~~~~もうっ！バカっ！」

ぷいつ、とそばを向いてしまった。

はて、褒めたのに何でだ？

と、ふと時計に目をやる。

「っと、もうこんな時間か。そろそろ帰るかな」

いつの間にやら十時近くを指していた。

楽しい時間はあっと言う間、って事かな。

楽しい時間、か。

最近、楽しいと思う事が増えてきた気がする。

最近とはつまり、平沢と出会ってから。

こいつには本当に、感謝してもしきれない。

「本当ですね、遅くまで引き止めてすみません」

「別に引き止めてないいだろ。俺が居たかったから居ただけだ」

「そうですか？ふふ、楽しんでもらえて良かったです。あ、玄関まで送りますね」

「お、ありがとう」

「私も行くー！アキ君、立たせてー」

「ったく・・・ホレ」

手を差し出す。

「わーい、ありがとう」

「ふふ、ホント仲良いね」

「でしょー？」

「憂ちゃんとも今日で仲良しになれたと思ってるんだけど、俺の勘違いか？」

「ホントですか！？嬉しいです！」

勘違いじゃなかったようだなによりだ。にしても、今日は本当に良い日だなあ。

憂ちゃんと仲良くなれたし、平沢とも一層仲良くなれたと思うし、

何よりこの空間が大好きになった。

「あ、晃さんカレーの材料忘れてますよ?」

だから、またここにお邪魔しようと思う。

「いや、わざと置いていつてるんだよ。今度は俺がご馳走する番だろ?」

連休の間にも。

「とびっきりのカレー、食わせてやるよ」

この暖かい空間に。

家族！！（後書き）

お疲れ様でした。

ちなみに、律っちゃんはまだか！澪しゃんを出せ！むぎゅっつっつう
う！

と思ってる方々もいらっしやるかと思いますが、すいません、まだ
もう少し先です。

甘恋！！（前書き）

初の唯視点（とういより晃以外の視点）&甘甘描写。
苦手な方にはお勧めしません。
苦手じゃない方にもお勧め出来ません。
宇宙人にはお勧めです。

甘恋！！

連休が明けました。平沢唯です。

梅雨にはまだ早いけど、今日は大雨です。

ギターが濡れちゃうから雨は嫌い。

だけど、おかげで体育が、男子のバスケットを見学するだけになりました！

運動が苦手な私にとって、これはかなりラッキーだよ、ふんすつ！
和ちゃんとお喋りしながらなんとなく見ていると、よく知る男子を見つけた。

「あ、アキ君だー」

「隣のクラスの男子と一緒にね。友達少ないんだし、これを機に仲良くなれば良いんだけど」

「あはは、そうだねー」

上崎 晃くん。

私の、高校で出来た最初の友達で、初めての男友達。
背が高い。多分180くらいかな？

あと料理が凄く上手。連休中に作ってくれたカレーは、憂の作ってくれるカレーの次に美味しかった。

勉強も出来る。和ちゃんほどじゃないけど。

それと、和ちゃんの言う通り、友達が少ないみたい。

でも友達が出来ないんじゃないかって、作らないだけだと思う。勿体ない。

だって凄く話しやすいし、一緒にいて楽しいし、優しいし。
とっても良い人なんだもん。憂も懐いてるし。

初めて会った時は、すごく怖くて、冷たくて、人と接するのを嫌がってたけど。

どうしてだろ？

「唯、どうしたの？ポ一っとして」

「ふえ？あ、ごめんごめん。ちょっと考え事」

「まったく・・・試合見てなかったの？晃、凄いわよ」

和ちゃんに言われ、アキ君の姿を探す。

私が見つけた時にちょうどパスを受け取っていた。
と思ったら、あっという間にみんな抜いてゴール決めちゃった。

「わっ、すごい！」

「運動神経、良かったのね」

「あっ、写真撮らなきゃ！」

「こら、授業中よ」

「まあまあ。無礼講だよ、和ちゃん？」

「意味わかんないわ・・・」

とにかく携帯をジャージのポケットから取り出し、アキ君にピントを合わせる。

撮る瞬間にちょうどアキ君がこっちらへんを向いてくれたので、良い写真になりました！

憂に送ってあげよー。送信、っと。
用が済んだ携帯をポケットにしまい、試合を見ていると、隣の女の子達の会話が聞こえてきた。

「ねえねえ、あの人ちよつとカッコよくない？」

「ちよつとって言うか、かなりカッコいいと思う」

「だよねだよね！アドレス、聞いちゃおっかなー」

「ホント、ミーハーだよね、美咲って」

「いいじゃん、別に。あんたも一緒に行かない？」

「・・・行こっかな」

「うわっ。珍しく積極的ね、優子」

「だって、本気でカッコイイし・・・」

「確かにねー」

二人が指さしていたのはアキ君。

私も、アキ君はカッコいいと思う。

今の活躍してる姿もそうだけど、見た目も。

綺麗だけど男らしい顔だし。

スタイル良いんだけど、細いわけじゃなくて、男の子ーって体型だし。

私の好みとかじゃなくて、誰が見てもカッコいいって言うと思うな！。

隣の子達はアキ君にアドレスを訊こうとしてるけど、私はもう知ってるもんねっ！ふんすっ！
などと、ちよつとした優越感に浸っていると、

「唯、いいの？」

和ちゃんが小声で話しかけてくる。

「え？何が？」

「何がってホラ、隣の人達が・・・」

「あ、うん！アキ君、カッコイイよねー」

「そうじゃなくて・・・はあ、何でもないわ」

「？」

結局何が言いたかったのかな？
よく分かんないや。

と、ここで授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「それじゃ、戻りましょ」

「ほーい」

和ちゃんに言われて、教室へ戻る。

体育館を出る時、さっきの二人、だけじゃなく、他にも何人かがアキ君の周りに集まっていた。

その子達はみんな可愛くて、私なんかじゃ敵わないって思わされた。

あれ？敵わないってなんだろう？別に競ってもないのに。
私はよくわからないまま、何だかモヤモヤした気持ちのまま体育館を出た。

胸が、チクリと痛んだ。

友達が出来ました。上崎 晃です。

偶然なのか、また体育でバスケの3on3をキツカケに。

ま、今回は普通に同じチームになって、普通に仲良くなったただけなんだが。

少し、安心した。

俺は、相手から寄ってきてくれないと、友達なんか出来ないと思っていたから。

だって、自分から近づこうにも、どうやって仲良くなればいいかわかんないし。

だから今回みたいに、何気ない事で仲良くなれる様な、そんな最低限の社交性と人間性が俺に残っていたのが、素直に嬉しかった。

「お疲れ、晃。バスケ上手いんだね」

こいつは飛高^{ひたか} 空^{そら}。

隣のクラスの、この学校で数少ない男子の一人だ。

背が小さくて、小顔で童顔。

声も高く、服装によつては女にしか見えない。

今流行りの男の娘って奴だな。

「別に、大した事な・・・おわっ！」

「お前のおかげで女子の熱い視線は、俺達に釘付けだぜ！はっはっは、お前も喜べ、アキ！」

いきなり肩を組んできたこの暑苦しい奴は、桐島 慶きりしま けい。
うるさくてやかましくて女たらしな、同じく隣のクラスの男子。
試合中、女子が見てるから良いとこ見せるぜ！みたいな事しか言っ
てなかった。

中肉中背。少し肌が色黒で、ピアスを開けている。

世間で言うイケメンってのに属するとは思うが、黙ってた方がモテ
るんじゃないだろうか。

「俺はそういうのには興味ねーよ」

「おうおう、さすがセンス！美男子様は余裕ですなー。もしや既に
彼女持ちか！？」

「や、彼女なんかいたことすらないけど・・・つつか美男子って、
俺が？」

「あん？」

「それって謙遜してるの？それとも、もしかして自覚無し？」

こいつらの反応を見ると、やっぱり俺の事みたいだ。

そう言えば、晴や悠にも言われた事ある気がする。

あの時は、からかわれてると思って軽く聞き流したが。

男から見たら、俺は美形なのか？

「つつか彼女いたこともないってマジか？」

「ああ」

「でも告白された事くらいあんだろ？」

「いや、ない」

「マジかよ！？お前の周りにいた女達は見ろ目がねえな」

いや、まあ。

今まで周りに女がいなかったんだけどな。
と言うか、周りに誰もいなかった。あいつら以外。

「勿体ないね。晁、凄くカッコいいのに」

「あのさ空。お前に言われると、ちょっとドキドキするんだけど」

俺がそう言うのと、空はおしとやかに、くすりと笑った。

おい何だその仕草は。

可愛いじゃねーかこの野郎！

「おい見ろ、美少女達が寄って来たぜ！」

「慶、ついに幻覚を見る様になったんだね」

「ちげーよ！ガチだって！」

慶の視線を追ってみると、本当に見学していた女子の数人がこちらに来た。

空の言う、慶の幻覚ではなかったみたいだ。
何か用だろうか？

「やあやあ子猫ちゃん達。この俺が華麗にコートを駆ける姿に、惚れちまったのかい？」

「慶、誰も聞いてないよ」

「なぬう！？」

「ねえねえ、名前教えてよ！」

「お、俺？上崎・・・」

「あのっ、彼女とかいますか！？」

「いや、その・・・」

「どこの中学！？」

「何組なの！？」

「ちょ、まっ・・・」

「番号交換しようよ！」

「あ、私も！」

何これ！？

何で俺、転校初日みたいな状況に陥ってんだ！？

めちゃくちゃに質問してくるくせに、俺の話聞いてくれる気配なし！

「け、慶！空！ヘルプ！」

「リア充爆発」

「良かったね、晃」

「良くねえから！」

助けてくれそうにもねえな、こいつら！
ええい、かくなる上は！

「退散！」

「あ、逃げたね」

「楽園から逃げるたあ、理解できねえなあ」

「好き勝手言っくな！」

走って教室まで逃げ込む。

途中、すれ違う人達に変な目で見られたが気にしない。

「あら晃、お疲れ様。そんなに息切らしてどうしたの？」

教室に入るとすぐに和がいた。
うんうん、この気づかいだよ。

「はあ、はあ・・・俺は帰ってきた・・・！」

「意味わからない事言っでないで、休んだら？」

「ああ、そうする・・・」

「あ、晃」

「ん？」

「見てたわよ、凄かったじゃない。あれも、その目のおかげかしら？」

試合の事か。

目の『おかげ』と言ったのは、和なりの優しさなんだろうな。やっぱこいつも、いい奴だ。

「ああ、だな。見えすぎて、逆にお前に視力を分けてあげたいくらいだよ」

「気持ちは嬉しいけど、この眼鏡、度は入ってないのよ」

「マジで!？」

「ええ。眼鏡かけてた方が、より優等生に見えるでしょ？」

「そんな裏話聞きたくなかった！」

「ま、冗談だけどね」

「休ませる気ねえだろ！」

分かりにくい冗談言っなよ！

お前が真顔で言ったら冗談に聞こえないんだよ！
などと色々言ってやりたかったが、とにかく疲れたので席に戻る。
その前の席には、お馴染み天然ドジっ娘がいた。

「よっ」

「あっ、アキ君。おかえりー」

ん？

ちよつと落ち込んでる？

何かいつもと表情が・・・
気のせいかな。

「ただいま」

「お風呂にする？ご飯にする？それともおかず？」

「ご飯をチヨイスしたら白飯のみか！？」

「やだなー。おかずも白飯のみだよ」

「そんなの絶対おかしいよ！」

「だってご飯はおかずだよ？」

「時系列は大切にしような！」

いやー。

落ち着くなー。

アホな会話だけど、すげえ落ち着く。
平沢特有の雰囲気だなあ。
和むわー。

「え？和ちゃんがどうかした？」

「心を読むなー。あと和は関係ないぞー」

「そう言えばアキ君、モテモテだったねー」

「見てたんなら助けてくれよ・・・」

「またまたー。嬉しかったくせにー」

「あーいつの苦手だなあ。なんつつか、ガツガツしてるつつつかさあ」

「でも可愛い子ばかりだったよ？」

「んー、そうかあ？お前の方がよっぽど可愛いけどなー」

「ええっ！？そ、そんなわけないじゃん！嘘ばかりー！」

「いやいや、本音だぞ？それに一緒にいて落ち着くし、話しやすいしなー」

「うつ・・・」

「どうした？」

「な、なんでもないよ!」

「ふーん・・・あつ!」

「ふえっ!ど、どうかした?」

「そついやお前、また勝手に写真撮ってたろ!」

「ええっ!?見てたの!?!」

「見てたよ!」

「何で試合中にこつち見るのさー!」

「そりゃあお前・・・何でだ?」

「知らないよー」

何でだっけ?

確か、平沢を探してたらちようと写真撮ってたと思うんだけど。
何で平沢を探してたんだっけ?

はて?

「そう言えばアキ君、あの二人とはお友達になれた?」

「あ、そうなんだよ!すげえ面白いコンビなんだぜ、今度お前にも紹介するよ!」

「本当!?わーい、楽しみー!」

「それなら今紹介してもらおうかつ！」

「うおっ、慶！？お前いつの間に！」

「せっかくだし、今日は晃も一緒にお昼食べない？って誘いに来たんだよ」

「空も・・・ああ、そういう事なら大歓迎だ」

「ほええ！可愛いー！アキ君、この子は！？」

「ん、こいつは飛高 空。女の子みたいだろ？」

「女の子より可愛いよ！あ、私平沢 唯！よろしくね、空くん！」

「うん、よろしく平沢さん」

「俺も紹介してくれー！アキー！頼むー！」

「わかってるよ、うるせえな！平沢、このやかましいのは桐島 慶。女たらしだから気を付けろよ」

「最後のは余計だよ！よろしくな、唯ちゃん」

「あはは、うん、よろしく慶くん」

「心配すんなよアキ、俺は友達の彼女を取ったりはしねーからよっ！」

「お？平沢、お前彼氏いたのか？」

「い、いないよそんなのっ！いた事もないよ！」

「わー、晁と全く一緒の答えだね」

「なんだ、てつきり二人は付き合ってるのかと・・・」

「「違うよ！」」

「息ぴったりだ」

「もう付き合っちゃまえよ。大体、アキも唯ちゃんも勿体ないぜ！二人共その気になりゃあいくらでも相手はいるだろーに」

こいつは好き勝手言いやがって。
平沢が俯いちゃまったじゃねえか。
照れる平沢って何か新鮮だなあ。
・・・何か可愛いな。

「どうなんだよ、アキ」

「どうも何も、俺は恋愛沙汰には興味ないと言うか、無縁と言うか」

「興味ないだと！？お前そりや何の病気だ！男は、いやさ人間は常に愛を求める生き物だろ！？」

「慶の妄言は置いといて、晁が恋愛に無縁って事はないんじゃない？さっきだって、いっぱい女の子が寄って来たし。晁くらいになると、あの中から選ぶ事だって出来るんだよ？」

「選ぶって・・・つつか俺がもし誰かと付き合つとしても、多分あの中にはいないよ」

「どうして？」

「タイプじゃないと言うか・・・あんなキャピキャピしたのはあんまり・・・」

「じゃあ質問。晁のタイプは？」

「考えた事もねえや」

「強いて言うなら？」

「ええ？そうだなあ、美人タイプより可愛いタイプの方がいいかな・・・」

「他には？」

「んーと。話しやすくて、一緒にいて、落ち着く・・・」

「んん？」

「可愛いタイプで？」

「話しやすくて？」

「一緒にいて落ち着く？」

「・・・」

「まんま平沢に当てはまるな・・・」

「可愛いらしいし、話しやすくて一緒にいて落ち着くし。」

「俺って・・・もしかして平沢の事が好きなのか？」

「確かに特別な感情はあるけども。」

・・・いや、違うな。

特別なのは平沢に感謝してるからだ。

もちろん人としては完全に好きな部類だけど。

そっという意味での好きじゃないはずだ。

「晃？どうしたの？」

「あ、な、なんでもない。とにかく昼飯にしようぜ」

「さんせーい！私もうお腹ペコペコだよー！」

「っとその前に・・・おい、和ー！」

和を呼ぶ。

どうせ一緒に食べるし、まとめて紹介しよう。

和が弁当を持ってこっちへ来る。

さっきと同じように、お互いの自己紹介を済ました。

その際、慶がピアスの件で和に説教をくらっていた。

でも、取り上げたり外させたりしないところが和らしい。

「よし、それじゃあ今度こそ飯にしよう」

「でも、この人数だとちょっと狭いね」

と平沢。

確かに、俺と平沢の机を付けても、五人は少し狭い。

もう一つ机を付けようにも、和の机は遠いし、他の人のを使うのも気が引ける。

どうしたものか。

「屋上で食つつてのはどうだ？青春しようぜ青春！」

慶の中では屋上で友達と昼飯を食うのが青春らしい。
まあ確かに、そんなイメージが無くはないけど。

「うん、いいんじゃないかな。僕は慶に賛成だよ」

「私も！風が気持ち良さそうだし」

「和は？」

「まあ、たまには良いわね、そういうのも」

「うつし、じゃあ決まりだ！屋上へ行くぞー！一番乗りは俺だー！」

「あつ、慶くんずるい！私が一番に行こうと思ったのにー！」

と、走って廊下に飛び出す。

ずっこける平沢。

その先で廊下は走るなど教師に怒られる慶。

「馬鹿が三人に増えたわ・・・」

「慶だけでも手に負えなかったのに、これは凄い事になりそうだよ・
・・・」

「和、二人目の馬鹿って、俺か・・・？」

「自覚があるだけあの二人よりはマシね」

「どーも」

「毒舌だね、真鍋さん・・・」

ひとまず平沢の元へ歩み寄り、手を貸し立たせる。

「大丈夫か？」

「いたたた・・・大丈夫」

「つたく、気を付けろよバカ」

「うん、ありがとう！」

「？何で嬉しそうなんだよ」

「えへへ、心配してくれたのかなって」

「そりゃ、まあ・・・」

心配にもなるだろ。

こいつはいつもいつも危なっかしいんだ。
何も無いところで転ぶし。

「ホラ、イチャついてないで早く屋上に行きましょう」

「い、イチャついてねえよ！」

何か今日はやたらと茶化される気がする。
厄日か？

厄日と言うほど嫌ではないけど。

でも、こんなにかかわれて嫌じゃないのは何でだろうか。
友達に囲まれて、楽しいからか？

いや、それもあるんだろうけど・・・

相手が、平沢だからか？

って事は、やっぱり・・・いやいや、でも・・・

「アキ君？早く行こー」

「えっ、ああ。今行くよ」

考えても無駄か。

第一、俺は人を好きになるってのがどんな感じなのかわからないんだ。

いくら考えても気づけるはずがない。

それに、万が一そうだとして。

気づいたからといって。

だから何だと言っただ。

そこからどうこうする気もないんだ。

悩んだところで、ただの徒労だ。

「何で置いて行くんだよ！」

屋上に到着し、仲良く四人で弁当を広げていると。

ようやく慶が教師に開放されたらしく、遅れて来た。

話を聞くとそこでもピアスの件で説教されたらしく、かなり凹んでいた。

「俺、もうピアスやめようかな・・・」

「何言ってるのさ。慶からピアスを取ると、何も残らないじゃない」

「空の言う通りだぞ？何も残らないじゃない」

「そうね、何も残らないじゃない」

「何なんだよお前らはよってたかって！そんなに俺をイジメて楽しいか！？」

「正直、あんまり」

「ゆ、唯ちゃん、みんなが苛めるよ」

「皆、ひどいよ！」

「おおつ、やっぱり唯ちゃんは優しい！」

「私は楽しいと思うな！」

「平沢、それフォローになってねえから！」

「えっ？そうかな、照れちゃうよお」

「褒めてもねえから！」

「ま、冗談だつてわかってるから、俺はあんまり気にしてねえけど
な！ところでアキ、俺はどこに座って食べばいいんだ？スペースが
見当たらないけど」

「おめえの席、ねえから！」

「本格的にイジメすぎだろ！」

イジッてるだけであって、イジメてるつもりは毛頭無いのだけど。
とりあえず、慶を横に座らせる。

その際、何故か慶の目尻には涙が溜まっていた。
そんなにお腹が空いていたのだろうか。

「アキは弁当か。自分で作ってるのか？」

「ああ。一人暮らしだからな」

「へー。綺麗に整ってるね」

「アキ君はね、料理がすごい上手なんだよ！ふんすっ」

「何であんたが自慢気なの・・・」

「憂ちゃんには敵わねえけどな」

「ういちゃんって？」

「平沢の妹だよ」

「えへへ、自慢の妹です！」

「ホント、誰に似たのかしらね」

「っていうか気になる事があるんだけどよ」

「ん？」

「何で同級生の唯ちゃんは苗字で呼んで、妹は名前呼びなんだ？」

「あ、そう言えばそうだね」

「そうだよ、そろそろ私の事も名前で呼んでいい頃だよ！」

確かに憂ちゃんは名前で呼んでるなあ。

でもあの時は憂ちゃんが気軽に呼んでくれって言って、しかも気が動転してたからな。

別に名前で呼ぶ事に元々抵抗はなかったけど。

じゃあ何で平沢は名前で呼ばないんだ？

今でこそ、呼び方が定着してしまった、と言えるけど。

初めはどうだったんだ？

平沢は俺に、唯でいいよと言ってきたはずだ。それは覚えてる。

じゃあ何で呼ばなかった？

和に言われた時は、すぐに名前で呼んだのに。

あの時俺は何て言った？

そっちの方が面白そう、だっけな。

何が面白いんだろ。今考えると意味不明だ。

俺は平沢を名前で呼ぶ事に抵抗があるのだろうか。

「別にいいじゃない、呼び方なんて。大事なのはどう接してもらってるか、でしょ？」

この和の言葉には納得できる。

出来るけど、俺が考えてるのは何で名前で呼ばなかったのか、何だよな。

「それに、何かのキツカケで呼び方が変わるかも知れないじゃない。特にあなた達は、ね」

「どういう、意味だ？」

「別に深い意味はないわよ。なんとなくそう思っただけ」

嘘だっ！！

と鬼の形相で叫ぶ。それこそ嘘だけど。とにかく和は嘘をついてる。

なんとなくとか、そんな気がするとか。

こいつは、そういう言葉を一番嫌うはずだ。

それでもその言葉を和が使う時は、決まって『自分で考える』と暗に示している時だ。

「それは、俺が自分で考えて答えが出るんだな？」

「ええ。今日1日でも色々と考えてたみたいだしね」

俺がさつきから色々悩んでたのも、こいつにはお見通しか。

「お前は何でも知ってるなあ」

「何でもは知らないわよ。知ってる事だけ。あとこの掛け合いを定着させるのはやめなさい」

「わかったよ母さん」

和に拳骨をくらったのは久しぶりだった。

「全く、あなたは どうして頭良いのにそんなにバカなのかしら」

そう呆れながら言う和の顔は、どこか楽しそうだった。
多分、俺はもつと楽しそうな顔をしてるんだろうな。

「馬鹿で結構。今まで全然面白くない男だったもんでな。これから
はちょっとくらい馬鹿でもいいだろう？」

「・・・そうね、いいと思うわ」

そう言って、和は食べ終えた弁当箱を持ち、立ち上がる。

「ただ、ちょっとやりすぎかもね」

そう言って、和は笑った。

屋上の強めの風に髪をなびかせ、大人っぽい仕草を見せながら。
だけどその笑顔にはどこか幼さを見せながら、笑った。
なんというか、さすがは平沢の保護者だ。
笑顔よく似合う。

「それじゃ、先に行くわ」

「何か用事か？」

「ええ。生徒会でね」

「大変だなあ。頑張れよ」

「ええ、ありがとう」

「じゃあね〜和ちゃん」

「また後でね、唯」

和と手を振り合って別れる。
相変わらず忙しそうな奴だ。

でもあいつは、忙しそうにしてる自分が好きなんだろうな。
イキイキしてるし。

「ア〜キ〜、さっき和ちゃんに見とれてただろ〜」

小声で何を聞いてくるかと思えば。
馬鹿かこいつは。

まったく・・・

「あれは見とれるだろ（キリッ）」

「ありや、アツサリ認めるんだな」

「認めるも何も、事実だし」

「じゃあなんだ、お前和ちゃんが好きなのか？」

「ん〜、違うな。あいつは保護者だよ」

「じゃあやつば唯ちゃんか？」

なんで二択なんだ、と思ったけど。

他に女友達いないし、これ以上選択肢を増やしようがないか。

で、またこの質問か。

今日で何回目だ、これ。

だから平沢はそういう対象じゃないんだ。
ない、はずだけど。

「・・・自分でもよくわからん」

「お？珍しく言葉を濁すじゃねえか」

「本当にわかんないんだ。人を好きになるってのがどんな感じなのか」

「何か他の人とは違く見えたり、知らない間に目で追っていたり、そんな小せえ事で良いんだよ最初は。要はちよつと特別な存在って事だ」

特別な存在、か。

特別なのは間違いない。

それは和や憂ちゃんももちろんそうなんだけど、平沢は特に。
でもそれは恋愛感情ではなく、恩や感謝の念から来てる特別さで。
って、これじゃさっきの繰り返しだ。

「・・・は。本当にわかんねんだなあ」

息を吐き呟く。

慶が吐いたそれは、溜め息ではなく何かに感心したような、そんな類いの物だった。

「今時の若者にしちゃあ、ちよいとピュア過ぎやしねえか？」

「なんじゃそら。つつかお前も今時の若者だろ」

「だから言っただよ。成り行きの恋とか、一夜限りの愛とか。今は当たり前だぜ？」

「・・・別にそれを否定する気はないけど、俺には無理だ」

まず色恋沙汰に興味もないし。

もしあったとしても、慶の言う今時の恋愛は、俺には出来そうにないな。

「それがいいんだよ！俺そいつの好きだぜ！恋愛ドラマみたいだしな！よし、決めた！アキ、お前には大恋愛してもらうぜ！」

？

??

何言い出すんだこの馬鹿は。

「だから、俺は別に恋愛なんか・・・」

「いゝや違うね、お前は自分で気付いてないだけだ。何にどう気付いてないのか、は言わないけどよ」

「なっ、何でだよ？」

「そっちの方が、盛り上がる！」

「わけがわからないよ！」

てか、何でこいつはいきなり楽しそうにしてるんだ？

やっぱり頭が少しおかしい可哀想な方でいらっしやったのでしょうか。

「じゃ、俺ちよつと行ってくるわ!」

「は?どこに・・・」

「ソラ!お前も来い!」

「え、ちよ、ちよつと・・・」

「ほえ?二人とも教室戻るの?」

「ああ、またな唯ちゃん!アキ、頑張れよ!」

「だから、何を・・・」

「じゃあな～～!」

物凄いスピードで消えてしまった。

わけもわからず連れ去られていった空の顔が印象的だったな。

「慶君どうしたの?」

「俺が聞きたいよ・・・ったく。意味わかんない事ばっか言いやがつて」

何だったんだ?

大恋愛してもらうとか言ってたけど・・・

そんなのあいつがどうこう出来る話じゃないだろうに。

結局は俺次第じゃないか。

俺が恋愛に興味を持ったり、誰かを好きにならない限り、あり得ない事だ。

なのに、何を盛り上がってるんだか。

「何て言ってたの？」

「俺に大恋愛させるんだと」

「ええっ！？・・・どういう事？」

「だから、俺が聞きたいって」

まあいい、放っておこう。

別に害はないだろうしな。

「じゃ、俺達もそろそろ戻るか？」

「えー？まだ時間いっぱい残ってるよ？」

「でももう食い終わったし」

「アキ君、私達はご飯を食べに来たんじゃないんだよ！青春しに来たんだよ！」

「なるほど。んで、青春つてのは屋上で何やればいいんだ？」

「え、えっと・・・しりとりとか！」

「帰る」

「え〜ん、待って待って〜！普通にお話するだけでいいから〜」

「わかった！わあかったから引つ付くな！」

「本当！？わーい！」

「抱ーきーつーくーなー！」

「えーなんでー？」

「なんでもくそもねえ！逆になんで抱きつく！？」

「なんとなく」

またなんとなくか！

お前のなんとなくはいつもおかしいんだよ！

大体、嫁入り前の女子が男にベタベタするってどうなんだ？

これは一回注意しとくべきかな。

「お前さ、誰でも見境なく抱きつくのやめた方がいいと思うぞ」

「え〜？見境あるよ〜」

「じゃあどいう基準なんだ？」

「基準・・・よくわかんないや」

見境あるんじゃないかったのかよ。

明確な基準はないけど、こいつの中ではなんとなく基準があるのか？

そう、なんとなく。

「じゃあさ、誰なら抱きつくんだ？」

「憂とか和ちゃんとか・・・」

その二人は妥当だな。
むしろ目撃してるし。

「他には？」

「アキ君」

「俺は言わずもがなだ。他の奴だよ、他！」

「えゝ、もういないよゝ」

は？

「三人だけ？」

「うん、基本的には・・・」

うそん。

何で？

憂ちゃんと和はまあ当然だろ。

んで、この大本命二人に対する対抗馬が何で俺？
まあまあ、男が俺だけなのはいい。

平沢は男友達が少ないから、それは予想出来た。
問題は、憂ちゃんと和だけだった事だ。

妹と幼馴染。であり、二人とも平沢の保護者。であるから、特別な存在。

こんな事、今更整理しなくてもわかる。
でも、だけど、何で。
そこに俺がいるんだ。

「そんなの簡単な事だよ」

「ん！？おいおい待て待て！心を読んで良い流れでも内容でもなか
つただろ！」

「アキ君はね」

構わず話し初めてやがったこのヤロ！。

・・・まあいいか。
教えてくれるなら教えてもらってこう。
気になるし。

「アキ君はね、憂や和ちゃんと同じくらい、私にとって特別な人だ
からだよ」

そんな事を。

そんな、こつ恥かしい事を。

そんな、衝撃的な事を。

平沢はいつもの・・・いや、いつも以上の笑顔で言い放った。

「それに何か抱きつきやすいつていうか、落ち着くつていうか」。
あと、アキ君良い匂いするし！」

「ちょっと、風に当たってくる」

「何そのちよつと飲みすぎた人が少し席を外す時のテンプレみたいな言い方！？ていうか風に当たってるって、ここが屋上だから一番……ってアキ君！？もゝ、待ってよゝ！」

何か平沢がクネクネしながら言ってたけど。

その後に俺の背中に色々ツツコミを入れてた気もするけど。

何も頭に入って来なかった。

ていうか今現在何も聞こえない。

俺の心臓の音がデカすぎて、他の音が遮断されてる。

何だこれ。

こんなの初めてだ。

何か病気にかかったのかな。

顔も熱いし。

早退しようかな……

「アキ君！！！」

「うわぁ！！な、なんだよいきなり！」

「さっきからずっと呼んでたよゝ！もう……はいつ、お弁当箱忘れてたよ？」

「お、おお……サンキュー」

「えへへ、どおいたしましてっ」

と、また満面の笑みを向けてくる平沢。
にしても、何か今日は心臓が元気だ。
さっきから跳び回ってるよ、こいつ。

一体どうしたんだろ。
全然わからん！

「アキ君？教室戻るんじゃないの？」

「え？も、戻るよ！戻るに決まってるだろ！」

「？じゃあ早く行こー」

「いいですとも！」

こりゃイカン。
重症だ。

何言ってるのか自分でもわからねえ。

一体どうしたっていうんだ。

クールなナイス害が俺のウリなのに（・・）

正体不明の病気にかかっちゃまった。

今日は早退だな。

晴と悠に今日は無理って連絡しとかないと。

あ、そうだ。

病院にも、連絡しないとな。

甘恋！！（後書き）

いやー難しい。

難しいね、恋愛描写。

ちなみに晃はかなり鈍ちんキャラです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9871x/>

れんあい!!! ~ けいおん!! × 恋愛 ~

2011年12月2日14時50分発行